

2021年9月7日(火)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

15:15 ~ 17:15 | 会場4 Zoom

スポーツ文化研究部会 【課題A】 テーマ別シンポジウム／SDGsとスポーツとの接点を探る

コーディネーター：近藤 智靖（日本体育大学）、山崎 史恵（新潟医療福祉大学）

15:15 ~ 15:55

[スポーツ文化-SA-1] 戦略的基軸の変化

本質とその客観的可視化

*澤田 陽樹¹ (1. 一般財団法人グリーンスポーツアライアンス)

15:55 ~ 16:35

[スポーツ文化-SA-2] オリンピックから考えるSDGsとスポーツの関係性

*石坂 友司¹ (1. 奈良女子大学)

16:35 ~ 17:15

[スポーツ文化-SA-3] アダプテッド体育・スポーツがSDGsに果たす役割について

*澤江 幸則¹ (1. 筑波大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題A】 大学体育の授業をいかに良質なものにするか

15:15 ~ 17:15 | 会場5 Zoom

学校保健体育研究部会 【課題A】 テーマ別シンポジウム／大学体育の社会的使命とその実現可能性を考える：歴史的変遷からみる大学体育の現在地

コーディネーター：高橋 浩二（長崎大学）、木村 華織（東海学園大学）

15:15 ~ 15:55

[学校保健体育-SA-1] わが国の高等教育改革にともなう大学体育の変遷とその実践に関する知見集積

*木内 敦詞¹ (1. 筑波大学)

15:55 ~ 16:35

[学校保健体育-SA-2] 大学体育授業の実践内容および大学体育の教員養成の変遷

*金谷 麻理子¹ (1. 筑波大学)

16:35 ~ 17:15

[学校保健体育-SA-3] 日本福祉大学における体育授業の運営および教員の組織づくり

*高村 秀史¹ (1. 日本福祉大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

15:15 ~ 17:15 | 会場6 Zoom

競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点

コーディネーター：荒井 弘和（法政大学）、須甲 理生（日本女子体育大学）

15:15 ~ 15:45

[競技スポーツ-SA-1] 体育・スポーツ系大学の視点から

*山田 永子¹ (1. 筑波大学)

15:45 ~ 16:15

[競技スポーツ-SA-2] 一般大学の視点から

*田原 陽介¹ (1. 青山学院大学)

16:15 ~ 16:45

[競技スポーツ-SA-3] 女子学生のトップアスリート養成の視点から

*川本 竜史¹ (1. 大東文化大学)

16:45 ~ 17:15

[競技スポーツ-SA-4] UNIVASの視点から

*谷釜 尋徳¹ (1. 東洋大学)**テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか**

15:15 ~ 17:15 | 会場7 Zoom

生涯スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／共生社会と生涯スポーツは共存できるのか：スポーツのパラダイムチェンジが共存への鍵

コーディネーター：内田 匡輔（東海大学）

15:15 ~ 15:55

[生涯スポーツ-SA-1] 身体と共生社会

スポーツのパラダイムチェンジに向けて

*菊 幸一¹ (1. 筑波大学)

15:55 ~ 16:35

[生涯スポーツ-SA-2] 共生社会実現を目指す、総合型地域スポーツクラブ事例報告

*大浜 三平¹ (1. NPO法人スマイルクラブ)

16:35 ~ 17:15

[生涯スポーツ-SA-3] 子どもも親も安心できるスポーツ環境の構築へ向けて

*藤後 悦子¹ (1. 東京未来大学)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

15:15 ~ 17:15 | 会場8 Zoom

健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方：「女」を生きることと健康・スポーツ

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学）、木塚 朝博（筑波大学）

15:15 ~ 15:55

[健康福祉-SA-1] 女性の運動・スポーツ実施

社会科学の立場から

*工藤 保子¹ (1. 大東文化大学)

15:55 ~ 16:35

[健康福祉-SA-2] 発育発達、ライフスタイルに応じた女性アスリート支援

*山口 香¹ (1. 筑波大学)

16:35 ~ 17:15

[健康福祉-SA-3] スポーツを通じた女性のヘルスケアを考える

*能瀬 さやか¹ (1. 東京大学医学部附属病院 女性診療科・産科)

2021年9月8日(水)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】 人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

10:45 ~ 12:45 | 会場2 Zoom

スポーツ文化研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／スポーツの理想とその暴力性：多様なスポーツ文化の醸成へ向けたスポーツ研究の自己反省

コーディネーター：高尾 尚平（日本体育大学）、山口 理恵子（城西大学）

10:45 ~ 11:25

[スポーツ文化-SB-1] スポーツ文化論の展開と学問論

*樋口 聡¹ (1. なし（広島大学名誉教授）)

11:25 ~ 12:05

[スポーツ文化-SB-2] スポーツをめぐる政策展開の10年とアカデミア

*清水 諭¹ (1. 筑波大学)

12:05 ~ 12:45

[スポーツ文化-SB-3] スポーツ科学の学際性・総合性とは

問題の共有から解決の共有に向けて

*森丘 保典¹ (1. 日本大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題C】 多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

15:30 ~ 17:30 | 会場2 Zoom

スポーツ文化研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(1)：文化の保存・流通の批判的検討から

コーディネーター：深澤 浩洋（筑波大学）

指定討論者：来田 享子（中京大学）

15:30 ~ 16:10

[スポーツ文化-SC-1] スポーツ文化の保存と体育・スポーツ史研究

批判的検討から

*鈴木 明哲¹ (1. 東京学芸大学)

16:10 ~ 16:50

[スポーツ文化-SC-2] 無形文化財として応援団文化を保存する

*瀬戸 邦弘¹ (1. 鳥取大学)

16:50 ~ 17:30

[スポーツ文化-SC-3] スポーツ文化の伝え方を考える

メディア報道の立場から

*滝口 隆司¹ (1. 毎日新聞社)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

10:45 ~ 12:45 | 会場3 Zoom

学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える：コロナ禍の保健体育から、あらためてその意義と価値を整理する

コーディネーター：高橋 和子（静岡産業大学）、細越 淳二（国士舘大学）

10:45 ~ 11:15

[学校保健体育-SB-1] 新型コロナウイルス感染症への対応を通して考える体育、保健体育の充実に向けた視点

*関 伸夫¹ (1. スポーツ庁)

11:15 ~ 11:45

[学校保健体育-SB-2] コロナ禍の体育授業実践と今後の体育の在り方の展望

*永末 大輔¹ (1. 千葉大学教育学部附属小学校)

11:45 ~ 12:15

[学校保健体育-SB-3] 当事者として社会の課題に向き合う保健授業を目指して

*丸山 洋生¹ (1. 愛知県立瀬戸高等学校)

12:15 ~ 12:45

[学校保健体育-SB-4] コロナ禍における特別支援学校での体育実践から考えたこと

*鈴木 敏成¹ (1. 東京都立田無特別支援学校)**テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか**

15:30 ~ 17:30 | 会場3 Zoom

学校保健体育研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導：学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離

コーディネーター：末永 祐介（東京女子体育大学）、柏木 悠（専修大学）

15:30 ~ 16:10

[学校保健体育-SC-1] 学習指導要領作成及び実施上の成果と課題

*白旗 和也¹ (1. 日本体育大学)

16:10 ~ 16:50

[学校保健体育-SC-2] 体育授業における教師と子どもの乖離

*佐藤 善人¹ (1. 東京学芸大学教育学部)

16:50 ~ 17:30

[学校保健体育-SC-3] 体育心理学の視野で捉えた基礎的運動能力の構造と保健体育の役割

*木島 章文¹ (1. 山梨大学教育学部)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

10:45 ~ 12:45 | 会場4 Zoom

競技スポーツ研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／パラ競技スポーツにおけるコーチ養成の現状とこれから

コーディネーター：内田 若希（九州大学）、広瀬 統一（早稲田大学）

10:45 ~ 11:25

[競技スポーツ-SB-1] 車いすテニス日本代表監督に至るパスウェイとコーチとしての学び

*中澤 吉裕¹ (1. 有限会社エヌプランニング)

11:25 ~ 12:05

[競技スポーツ-SB-2] 日本におけるパラスポーツ指導者養成システムの現状と課題

*金子 元彦¹ (1. 東洋大学)

12:05 ~ 12:45

[競技スポーツ-SB-3] 世界のパラスポーツ指導における指導論の特徴

*伊藤 雅充¹ (1. 日本体育大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

15:30 ~ 17:30 | 会場4 Zoom

競技スポーツ研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるフィジカルトレーニングの新たな潮流

コーディネーター：熊野 陽人（関西福祉大学）、吉岡 伸輔（東京大学）

15:30 ~ 16:00

[競技スポーツ-SC-1] レジスタンストレーニング研究における近年の潮流

*越田 専太郎¹ (1. 了徳寺大学)

16:00 ~ 16:30

[競技スポーツ-SC-2] rink side から生まれたタバタトレーニング

*田畑 泉¹ (1. 立命館大学)

16:30 ~ 17:00

[競技スポーツ-SC-3] トレーニングを個別化するためのアセスメント

*山下 大地¹ (1. 国立スポーツ科学センター)

17:00 ~ 17:30

[競技スポーツ-SC-4] ハイパフォーマンスアスリートの身体負荷モニタリング

*小山 孟志¹ (1. 東海大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】 スポーツの産業化は生涯スポーツ・人・地域社会といかに関連するか

10:45 ~ 12:45 | 会場5 Zoom

生涯スポーツ研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／Well-Beingの実現に向けて：生涯スポーツのこれからと社会・産業、そして人

コーディネーター：松尾 哲矢（立教大学）、林 洋輔（大阪教育大学）
指定討論者：関根 正美（日本体育大学）

10:45 ~ 11:25

[生涯スポーツ-SB-1] Well-being研究と展望

その社会との接点としてのスポーツ

*渡邊 淳司¹ (1. NTTコミュニケーション科学基礎研究所)

11:25 ~ 12:05

[生涯スポーツ-SB-2] Well-Beingの実現とスポーツの産業化

*高橋 義雄¹ (1. 筑波大学)

12:05 ~ 12:45

[生涯スポーツ-SB-3] 健康・科学・産業

産・官・学が生み出す健康の諸相とWell-Being

*重松 良祐¹ (1. 中京大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

15:30 ~ 17:30 | 会場5 Zoom

生涯スポーツ研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点：国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて

コーディネーター：中野 貴博（中京大学）

15:30 ~ 16:10

[生涯スポーツ-SC-1] 中年世代の運動・スポーツ参加の現状と課題

*澤田 亨¹ (1. 早稲田大学)

16:10 ~ 16:50

[生涯スポーツ-SC-2] 若年世代の運動・スポーツ参加の現状と施策立案に向けた論点

「スポーツライフ・データ」を手がかりに

*宮本 幸子¹ (1. 笹川スポーツ財団)

16:50 ~ 17:30

[生涯スポーツ-SC-3] パーソナリティタイプに基づいたスポーツ・身体活動の促進のすすめ

*小笠原 悦子¹ (1. 順天堂大学大学院)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

10:45 ~ 12:25 | 会場6 Zoom

健康福祉研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／認知機能改善のための身体活動の在り方

コーディネーター：樋口 貴広（東京都立大学）、根本 みゆき（筑波大学附属病院）

10:45 ~ 11:18

[健康福祉-SB-1] 高齢者の認知機能維持・向上に資する運動の役割

*兵頭 和樹¹ (1. 公益財団法人明治安田厚生事業団体力医学研究所)

11:18 ~ 11:51

[健康福祉-SB-2] 運動と認知

子どもの運動発達の立場から

*森 司朗¹ (1. 鹿屋体育大学)

11:51 ~ 12:24

[健康福祉-SB-3] 認知症専門医の立場から体育分野に期待すること

*水上 勝義¹ (1. 筑波大学)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題C】 運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

15:30 ~ 17:30 | 会場6 Zoom

健康福祉研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／テレワーク時代における心身の健康の保持増進の工夫と提言（新しい生活様式と健康の保持・増進）

コーディネーター：岩井 浩一（茨城県立医療大学）、沢井 史穂（日本女子体育大学）

15:30 ~ 16:00

[健康福祉-SC-1] COVID-19のパンデミックがもたらした就労者のライフスタイルの変容と健康への影響

*岡 浩一朗¹ (1. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

16:00 ~ 16:30

[健康福祉-SC-2] With/Afterコロナ下のフィットネス産業界の動向とビジョン

*岩井 智子¹ (1. 株式会社クラブビジネスジャパン)

16:30 ~ 17:00

[健康福祉-SC-3] 新生活様式におけるアダプテッド・スポーツの実践例

*塩田 琴美¹ (1. 慶應義塾大学総合政策学部)

17:00 ~ 17:30

[健康福祉-SC-4] クラウド型教育支援サービスによる緊急事態宣言下での健康教育

*大槻 毅¹ (1. 流通経済大学スポーツ健康科学部)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

📅 2021年9月7日(火) 15:15 ~ 17:15 | 📍 会場4 Zoom

スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／SDGsとスポーツとの接点を探る

コーディネーター：近藤 智靖（日本体育大学）、山崎 史恵（新潟医療福祉大学）

現在社会は、ヒト・モノ・カネが容易に国境を越えていく時代である。こうしたグローバルな社会は、人々に多くの利益をもたらすと同時に、負の問題を突きつけてくる。たとえば、新型コロナウイルスの急速な感染拡大や地球規模の気候変動はその一例でもある。

こうした動きに対して国連では2015年に「持続可能な開発目標（SDGs）」を採択し、各国で様々な取り組みがなされている。スポーツ関係者の中でもSDGsの理念を踏まえた、取り組みが多数生まれている。しかしながら、オリ・パラをはじめとしたスポーツのメガイベントでは、ジェンダー、インテグリティ、コマーシャリズム等の視点から様々な課題が指摘されており、スポーツの在り方や意味が問い直されている。今般の東京大会も同様の課題がみられている。

こうしたグローバル課題とスポーツの課題といった2つの側面がある中で、本部会ではシンポジウム（1年目）として、SDGsとスポーツを取り上げ、その接点について議論をしたいと考えている。「そもそも」といった根源的な問いを大切に、たとえば、「そもそも両者の接点は本当にあり得るのか？」「そもそも双方にとっての利益は何か？」といった点から議論を展開する。

15:15 ~ 15:55

[スポーツ文化-SA-1] 戦略的基軸の変化

本質とその客観的可視化

*澤田 陽樹¹ (1. 一般財団法人グリーンスポーツアライアンス)

15:55 ~ 16:35

[スポーツ文化-SA-2] オリンピックから考えるSDGsとスポーツの関係性

*石坂 友司¹ (1. 奈良女子大学)

16:35 ~ 17:15

[スポーツ文化-SA-3] アダプテッド体育・スポーツがSDGsに果たす役割について

*澤江 幸則¹ (1. 筑波大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題 A】 テーマ別シンポジウム／ SDGsとスポーツとの接点を探る

コーディネーター：近藤 智靖（日本体育大学）、山崎 史恵（新潟医療福祉大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場4 (Zoom)

現在社会は、ヒト・モノ・カネが容易に国境を越えていく時代である。こうしたグローバルな社会は、人々に多くの利益をもたらすと同時に、負の問題を突きつけてくる。たとえば、新型コロナウイルスの急速な感染拡大や地球規模の気候変動はその一例でもある。

こうした動きに対して国連では2015年に「持続可能な開発目標（SDGs）」を採択し、各国で様々な取り組みがなされている。スポーツ関係者の中でもSDGsの理念を踏まえた、取り組みが多数生まれている。しかしながら、オリ・パラをはじめとしたスポーツのメガイイベントでは、ジェンダー、インテグリティ、コマーシャリズム等の視点から様々な課題が指摘されており、スポーツの在り方や意味が問い直されている。今般の東京大会も同様の課題がみられている。

こうしたグローバル課題とスポーツの課題といった2つの側面がある中で、本部会ではシンポジウム（1年目）として、SDGsとスポーツを取り上げ、その接点について議論をしたいと考えている。「そもそも」といった根源的な問いを大切に、たとえば、「そもそも両者の接点は本当にあり得るのか？」「そもそも双方にとっての利益は何か？」といった点から議論を展開する。

15:15 ～ 15:55

[スポーツ文化-SA-1]戦略的基軸の変化

本質とその客観的可視化

*澤田 陽樹¹ (1. 一般財団法人グリーンスポーツアライアンス)

<演者略歴>

2002年京都大学経済学部卒、三菱商事入社。台湾・ドイツ駐在を経て2017年同社退職後、露LUKOILに勤務。現在は、(一財)グリーンスポーツアライアンス代表理事、(一社)京都スマートシティ推進協議会理事兼事務局長を務める。本年4月より三重大学大学院生物資源学研究科(生物圏生命科学専攻)博士後期課程に進学。

2018年12月 COP24 で国連 UNFCCCより発表された「Sports for Climate Action Framework」は国連広報センターの日本語訳を参照すると、地球の気温上昇を 1.5°C に抑え、気候変動の最悪の影響を回避するためには、政府、民間セクターおよび市民社会のあらゆるレベルでより野心的で実効的な気候変動対策が今すぐ必要であるという認識は普遍的であると綴られている。18のスポーツ団体（内日本から8団体）で発足した同 Frameworkは2021年現在で200以上の団体に膨らんでいる。パリ協定と SDGs は、私たちの気候を安定化させ平和と豊かさを広げ、数十億人に機会を与える大きな潜在性を備えたビジョンに富む 2 つの合意であると同 Frameworkは続ける。Ecologicalなもののみならず、Socioculturalな取組も含めて各国のスポーツ団体で SDGsに関連する様々な取組が行われているが、それぞれの取組の客観的評価は、例えば上記気候科学のそれとは種類の異なるものに見受けられるケースもある。本質は何か、そしてその客観的な可視化とはどうあるべきか考察する。なお、本発表では、前半に SDGsの概説を行い、後半では上記の点に触れていくこととする。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題 A】 テーマ別シンポジウム／ SDGsとスポーツとの接点を探る

コーディネーター：近藤 智靖（日本体育大学）、山崎 史恵（新潟医療福祉大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場4 (Zoom)

現在社会は、ヒト・モノ・カネが容易に国境を越えていく時代である。こうしたグローバルな社会は、人々に多くの利益をもたらすと同時に、負の問題を突きつけてくる。たとえば、新型コロナウイルスの急速な感染拡大や地球規模の気候変動はその一例でもある。

こうした動きに対して国連では2015年に「持続可能な開発目標（SDGs）」を採択し、各国で様々な取り組みがなされている。スポーツ関係者の中でもSDGsの理念を踏まえた、取り組みが多数生まれている。しかしながら、オリ・パラをはじめとしたスポーツのメガイイベントでは、ジェンダー、インテグリティ、コマーシャルリズム等の視点から様々な課題が指摘されており、スポーツの在り方や意味が問い直されている。今般の東京大会も同様の課題がみられている。

こうしたグローバル課題とスポーツの課題といった2つの側面がある中で、本部会ではシンポジウム（1年目）として、SDGsとスポーツを取り上げ、その接点について議論をしたいと考えている。「そもそも」といった根源的な問いを大切に、たとえば、「そもそも両者の接点は本当にあり得るのか？」「そもそも双方にとっての利益は何か？」といった点から議論を展開する。

15:55 ～ 16:35

[スポーツ文化-SA-2]オリンピックから考える SDGsとスポーツの関係性

*石坂 友司¹ (1. 奈良女子大学)

＜演者略歴＞

奈良女子大学准教授。専門分野はスポーツ社会学。オリンピックをはじめとしたスポーツ・メガイイベントが地域・都市・国家に及ぼす影響について研究。著書に『現代オリンピックの発展と危機 1940-2020』（人文書院）、共編著に『未完のオリンピック』（かもがわ出版）、『〈ニッポン〉のオリンピック』（青弓社）など。

17のゴールを持つ SDGs達成に向けた取り組みが多様な領域で開始されている。スポーツとの接点もさまざまに考えられるところだが、「開発と平和のためのスポーツ」（SDP）に関する領域を除けば、議論が進んでいるとは言いがたい。スポーツ界では未だ、SDGsを引き受けるべき自らの課題として認識していないのが現状ではないだろうか。本報告ではこのことの意味を考えるために、近年 SDGsの推進者としても位置づけられているオリ・パラ、特にオリンピックを題材にして考察を加えたい。IOCは自らの使命と役割について環境問題を柱の一つに据え、スポーツにおける持続可能性について議論してきた経緯を持つ。また、認知度は低いものの、東京大会では持続可能な大会の準備・運営に向けて5つの主要テーマが掲げられてきた。最終局面で別の意味の持続可能性が問われているオリンピックだが、開催準備を通して、ジェンダー平等や都市開発のあり方など、スポーツを通して見える社会に改善すべき点が多く含まれていることを明らかにしてきた。SDGsがなぜスポーツに必要なのかに加え、議論が進まないことにどのような問題がはらまれているのかについて考えたい。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題 A】 テーマ別シンポジウム／ SDGsとスポーツとの接点を探る

コーディネーター：近藤 智靖（日本体育大学）、山崎 史恵（新潟医療福祉大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場4 (Zoom)

現在社会は、ヒト・モノ・カネが容易に国境を越えていく時代である。こうしたグローバルな社会は、人々に多くの利益をもたらすと同時に、負の問題を突きつけてくる。たとえば、新型コロナウイルスの急速な感染拡大や地球規模の気候変動はその一例でもある。

こうした動きに対して国連では2015年に「持続可能な開発目標（SDGs）」を採択し、各国で様々な取り組みがなされている。スポーツ関係者の中でもSDGsの理念を踏まえた、取り組みが多数生まれている。しかしながら、オリ・パラをはじめとしたスポーツのメガイイベントでは、ジェンダー、インテグリティ、コマーシャリズム等の視点から様々な課題が指摘されており、スポーツの在り方や意味が問い直されている。今般の東京大会も同様の課題がみられている。

こうしたグローバル課題とスポーツの課題といった2つの側面がある中で、本部会ではシンポジウム（1年目）として、SDGsとスポーツを取り上げ、その接点について議論をしたいと考えている。「そもそも」といった根源的な問いを大切に、たとえば、「そもそも両者の接点は本当にあり得るのか？」「そもそも双方にとっての利益は何か？」といった点から議論を展開する。

16:35 ～ 17:15

[スポーツ文化-SA-3]アダプテッド体育・スポーツが SDGsに果たす役割について

*澤江 幸則¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

筑波大学体育系准教授。筑波大学大学院修士課程体育学専攻修了後、横浜市北部地域療育センターで障害児の療育に携わっていた。その後東北大学大学院博士課程に編入学、修了。文京学院大学を経て、現職に至る。専門はアダプテッド体育・スポーツで、特に発達障害児の運動発達支援、インクルーシブ体育の実践に詳しい。

私が専門とするアダプテッド体育・スポーツ領域が、SDGsが掲げる目標に貢献できる可能性として、2つの面があると考えている。ひとつは、本研究領域はそもそも障害のある者に対して、運動やスポーツ、体育機会を保障すべき、アドボカシーとして機能を果たしてきた。そのため、本領域の研究・実践の充実を図ることは、SDGsの目標3（保健）や目標4（教育）に加え、目標8（成長・雇用）や目標10（不平等）、目標11（都市）の達成に寄与する可能性がある。加えて本研究領域は、障害のある者への体育・スポーツ指導からの帰納的枠組みとして、「その人に合わせて」スポーツや体育を変更し運動のもつ本来の楽しさを享受できる方法論（Adaptationアダプテッド）を確立してきた。そしてアダプテッドは、対象を障害だけにとどめず、体育・スポーツ場面から排除されている人たちを包摂する手段として活用されるようになった。こうした実践・研究は、先にあげた目標のなかの対象を拡充することに貢献するだろう。しかしアダプテッドに関する我が国の体育・スポーツ実践には、いまだ多くの課題が残されている。その解決のためには、本研究領域にとじない複合的な視点からの議論が求められることになる。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか**■ 2021年9月7日(火) 15:15 ~ 17:15 | 会場5 Zoom****学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／大学体育の社会的使命とその実現可能性を考える：歴史的変遷からみる大学体育の現在地**

コーディネーター：高橋 浩二（長崎大学）、木村 華織（東海学園大学）

本シンポジウムでは、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という課題を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定した。1年目は「歴史的変遷からみる大学体育の現在地」について確認する。1つ目は大学体育授業の制度や仕組みの変遷である。木内氏から、高等教育改革に伴う要請を受けて教養教育としての保健体育の授業がどのように実施され、大学体育に関わる知が集積されてきたのかについて検討して頂く。2つ目は大学体育授業の実践内容及び大学体育の教員養成の変遷である。金谷氏から、大学体育の独自性や可能性について検討し、大学教育における体育の教育的価値や大学体育に対する内外の評価を洗い出して頂く。3つ目は大学体育授業の運営及びそれを通じた教員の組織作りの変遷である。高村氏から、大学体育の運営や教育・研究を通じた養成の内容を、共通の知見として提出するために必要な事柄を示して頂く。以上の検討から、これまでの大学教育の制度や大学体育の実践によって積み重ねられてきた知を歴史的変遷から読み直し、現代社会に求められる大学体育のあり方について探究する。

15:15 ~ 15:55

[学校保健体育-SA-1] わが国の高等教育改革にともなう大学体育の変遷とその実践に関する知見集積

*木内 敦詞¹ (1. 筑波大学)

15:55 ~ 16:35

[学校保健体育-SA-2] 大学体育授業の実践内容および大学体育の教員養成の変遷

*金谷 麻理子¹ (1. 筑波大学)

16:35 ~ 17:15

[学校保健体育-SA-3] 日本福祉大学における体育授業の運営および教員の組織づくり

*高村 秀史¹ (1. 日本福祉大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／大学体育の社会的使命とその実現可能性を考える：歴史的変遷からみる大学体育の現在地

コーディネーター：高橋 浩二（長崎大学）、木村 華織（東海学園大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場5 (Zoom)

本シンポジウムでは、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という課題を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定した。1年目は「歴史的変遷からみる大学体育の現在地」について確認する。1つ目は大学体育授業の制度や仕組みの変遷である。木内氏から、高等教育改革に伴う要請を受けて教養教育としての保健体育の授業がどのように実施され、大学体育に関わる知が集積されてきたのかについて検討して頂く。2つ目は大学体育授業の実践内容及び大学体育の教員養成の変遷である。金谷氏から、大学体育の独自性や可能性について検討し、大学教育における体育の教育的価値や大学体育に対する内外の評価を洗い出して頂く。3つ目は大学体育授業の運営及びそれを通じた教員の組織作りの変遷である。高村氏から、大学体育の運営や教育・研究を通じた養成の内容を、共通の知見として提出するために必要な事柄を示して頂く。以上の検討から、これまでの大学教育の制度や大学体育の実践によって積み重ねられてきた知を歴史的変遷から読み直し、現代社会に求められる大学体育のあり方について探究する。

15:15 ～ 15:55

[学校保健体育-SA-1]わが国の高等教育改革にともなう大学体育の変遷とその実践に関する知見集積

*木内 敦詞¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

筑波大学体育系教授。大阪工業大学准教授を経て2014年より現職。専門は大学体育論。筑波大学と鹿屋体育大学による3年制博士課程「大学体育スポーツ高度化共同専攻」に従事。（公社）全国大学体育連合常務理事／研究部長。「大学体育スポーツ学研究（旧大学体育学）」「大学教育学会誌」「スポーツパフォーマンス研究」編集委員。

大学体育は、わが国の高等教育改革の荒波の中でどのように変遷してきたのか。1991年の大学設置基準大綱化以降、多くの大学で体育の必修から選択への移行が進み、実技と講義からなる演習授業が増え、シラバス公開やFD授業アンケートの実施は常態化した。このように、大学体育が苦境に立たされたり、教員の負担が増えたことは事実だが、その一方で勝ち得た成果もある。その1つに、大学体育の実践に関する学術的知見の集積を挙げることができる。大学体育は何を学ぶ科目なのか、どのような体育授業がどのような点で高い学修効果を発揮するのか、などに関する「大学体育の授業研究」の蓄積である。これは、1990年代後半から米国高等教育界で広まった Scholarship of Teaching and Learning (SoTL) の概念と一致する。SoTLとは、専門分野の研究と同様に、教育活動を論文として公表し他者からの批判的評価にさらすことで、教授・学習過程のレベルを向上させようという学術的探究をさす。高等教育に体育が堅固に位置づくためには、大学体育における SoTLの推進は必須であることを、最後に主張したい。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／大学体育の社会的使命とその実現可能性を考える：歴史的変遷からみる大学体育の現在地

コーディネーター：高橋 浩二（長崎大学）、木村 華織（東海学園大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場5 (Zoom)

本シンポジウムでは、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という課題を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定した。1年目は「歴史的変遷からみる大学体育の現在地」について確認する。1つ目は大学体育授業の制度や仕組みの変遷である。木内氏から、高等教育改革に伴う要請を受けて教養教育としての保健体育の授業がどのように実施され、大学体育に関わる知が集積されてきたのかについて検討して頂く。2つ目は大学体育授業の実践内容及び大学体育の教員養成の変遷である。金谷氏から、大学体育の独自性や可能性について検討し、大学教育における体育の教育的価値や大学体育に対する内外の評価を洗い出して頂く。3つ目は大学体育授業の運営及びそれを通じた教員の組織作りの変遷である。高村氏から、大学体育の運営や教育・研究を通じた養成の内容を、共通の知見として提出するために必要な事柄を示して頂く。以上の検討から、これまでの大学教育の制度や大学体育の実践によって積み重ねられてきた知を歴史的変遷から読み直し、現代社会に求められる大学体育のあり方について探究する。

15:55 ～ 16:35

[学校保健体育-SA-2]大学体育授業の実践内容および大学体育の教員養成の変遷

*金谷 麻理子¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

筑波大学体育系准教授。鹿屋体育大学助手を経て2002年に筑波大学に着任。専門種目は体操競技。筑波大学に着任以降現在まで主に大学体育における実技授業を担当すると共に、2017～2019年度には博士課程（大学体育スポーツ高度化専攻）にも在籍し、自身の教育活動を学問的見地から分析することに継続的に取り組んでいる。

自身は大学体育で何を教えることができるのか、その目標を達成するためにはどのようなプログラムを構成すべきなのか、また受講生の学修効果をより高めるためにはどのような能力の向上に努めるべきなのか、さらにはそもそも大学体育の独自性とは何か…。これらは筆者がこれまで大学体育を担当する中で常に自問自答してきた問いである。

今回はこのような背景をもつ筆者が、自身が大学教員になるまでのプロセスや、大学体育で専門あるいは非専門のスポーツ種目を通して行ってきた教育活動、大学院において大学体育教員養成の一端に携わっている現状、さらには現職教員でありながら大学体育教員の養成課程で学んだ経験にもとづいて、大学体育の学修内容とその効果、そしてそれらを実現するための要因について検討した結果を発表する。この発表をきっかけに、体育の中核的な学修活動のひとつであるスポーツの運動学習に着目した場合の大学体育の学修内容とその効果がより広く理解され、それに関連して今後の大学体育教員の養成方法について議論を深めていければ幸いである。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題A】大学体育の授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／大学体育の社会的使命とその実現可能性を考える：歴史的変遷からみる大学体育の現在地

コーディネーター：高橋 浩二（長崎大学）、木村 華織（東海学園大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場5 (Zoom)

本シンポジウムでは、「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」という課題を達成するために、3年間のテーマ「大学体育から提案する質の高い学校保健体育の提供、実現」を設定した。1年目は「歴史的変遷からみる大学体育の現在地」について確認する。1つ目は大学体育授業の制度や仕組みの変遷である。木内氏から、高等教育改革に伴う要請を受けて教養教育としての保健体育の授業がどのように実施され、大学体育に関わる知が集積されてきたのかについて検討して頂く。2つ目は大学体育授業の実践内容及び大学体育の教員養成の変遷である。金谷氏から、大学体育の独自性や可能性について検討し、大学教育における体育の教育的価値や大学体育に対する内外の評価を洗い出して頂く。3つ目は大学体育授業の運営及びそれを通じた教員の組織作りの変遷である。高村氏から、大学体育の運営や教育・研究を通じた養成の内容を、共通の知見として提出するために必要な事柄を示して頂く。以上の検討から、これまでの大学教育の制度や大学体育の実践によって積み重ねられてきた知を歴史的変遷から読み直し、現代社会に求められる大学体育のあり方について探究する。

16:35 ～ 17:15

[学校保健体育-SA-3]日本福祉大学における体育授業の運営および教員の組織づくり

*高村 秀史¹ (1. 日本福祉大学)

<演者略歴>

日本福祉大学全学教育センター助教。専門はICTやキャンプを活用した学び。所属大学では全学部に跨る一般体育授業のコーディネートを担当。FD研修会等を開催し、非常勤、専任を問わず学びあえる組織づくりに取り組んでいる。また、高校教員時代の実践経験を活かし、初年次教育に資する体育授業の展開にも取り組んでいる。

日本福祉大学（以下、本学）では、大学設置基準の「大綱化」による必修から選択科目へ移行する状況を迎える以前から、大学体育の在り方について検討を行ってきた。目的は、大学で学ぶに値する体育の在り方の検討であり、体育科目を「必修」として存続するための学内理解を求めるための改革であった。検討の結果、大学体育の成果の到達点として「20歳の学力」を設定し、一般体育授業を運営している。

現在、多くの大学で体育授業を非常勤講師が担当する現状がある一方、非常勤講師の担い手は年々減少している。本学においても、初年次の一般体育授業の8割を大学での教育活動未経験者を含む、非常勤講師に委嘱している。「20歳の学力」の考え方に基づく質の高い学びを学生に提供するためには、専任、非常勤を問わず、体育授業の理念の理解をはじめ、授業実戦や問題点の共有、解決方法などをお互いに学び合い、研鑽を重ねる必要があった。本報告では、本学における「20歳の学力」を柱とした体育授業の運営と、コミュニケーションを深め、学びあえる教員の組織づくりのために開催しているFD研修会や懇親会等の取り組みについて報告を行う。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか**■ 2021年9月7日(火) 15:15 ~ 17:15 | 会場6 Zoom****競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点**

コーディネーター：荒井 弘和（法政大学）、須甲 理生（日本女子体育大学）

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点について、4つの視点（①体育・スポーツ系大学、②一般大学、③女子学生、④UNIVAS）から議論する。具体的には、以下のような論点を考えている。体育・スポーツ系大学と一般大学には、それぞれどのような機能が求められており、両者はどのように連携すればよいのか。トップアスリート養成の拠点として大学が位置づくならば、どのような組織と、どのように協働することが期待されるのか。学生アスリートは、どのようなコーチから、どのようなコーチングを受けているのか。そして、そのコーチを取り巻く環境はどのようになっているのか。大幅な発展が見込まれている女子学生アスリートを取り巻く環境は、今後どのように変化してゆくのか。大学は、どのようなトップアスリートを養成すればよいのか。そしてそのために、大学はどのような支援を行うべきなのか。

批判的でありつつも、前向きに、そして専門領域の越境を恐れぬシームレスな対話を期待したい。

15:15 ~ 15:45

[競技スポーツ-SA-1] 体育・スポーツ系大学の視点から

*山田 永子¹ (1. 筑波大学)

15:45 ~ 16:15

[競技スポーツ-SA-2] 一般大学の視点から

*田原 陽介¹ (1. 青山学院大学)

16:15 ~ 16:45

[競技スポーツ-SA-3] 女子学生のトップアスリート養成の視点から

*川本 竜史¹ (1. 大東文化大学)

16:45 ~ 17:15

[競技スポーツ-SA-4] UNIVASの視点から

*谷釜 尋徳¹ (1. 東洋大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点

コーディネーター：荒井 弘和（法政大学）、須甲 理生（日本女子体育大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場6 (Zoom)

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点について、4つの視点（①体育・スポーツ系大学、②一般大学、③女子学生、④UNIVAS）から議論する。具体的には、以下のような論点を考えている。体育・スポーツ系大学と一般大学には、それぞれどのような機能が求められており、両者はどのように連携すればよいのか。トップアスリート養成の拠点として大学が位置づくならば、どのような組織と、どのように協働することが期待されるのか。学生アスリートは、どのようなコーチから、どのようなコーチングを受けているのか。そして、そのコーチを取り巻く環境はどのようになっているのか。大幅な発展が見込まれている女子学生アスリートを取り巻く環境は、今後どのように変化してゆくのか。大学は、どのようなトップアスリートを養成すればよいのか。そしてそのために、大学はどのような支援を行うべきなのか。

批判的でありつつも、前向きに、そして専門領域の越境を恐れぬシームレスな対話を期待したい。

15:15 ～ 15:45

[競技スポーツ-SA-1] 体育・スポーツ系大学の視点から

*山田 永子¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

元日本代表女子ハンドボール選手、元日本代表女子コーチ、元日本代表女子ジュニアコーチ。

現在、筑波大学女子ハンドボール部監督、国際ハンドボール連盟Handball @ School（学校体育におけるハンドボール）講師を務める。

筑波大学体育系は、「競技力向上に関する研究、その研究成果を生かした競技実践・指導実践、そして指導者養成が高度なレベルで三位一体となって機能する高度競技力強化拠点」として、わが国の競技力向上に寄与することを使命のひとつとして掲げている。研究、競技実践、指導実践をどのように循環させているのかを体育系と自身のチームそれぞれで紹介する。体育系では、学群、大学院（前期・後期）の教育プログラムと課外活動によって、学生アスリートおよび大学院生コーチが学びと実践の好循環を実現している。自身が監督を務める女子ハンドボール部では、学生の目標を最大限サポートするために様々な取り組みを行っている。ほかに、ハンドボール競技におけるヨーロッパの学生アスリートの現状など紹介した後、自身が考える学生トップアスリートを取り巻く課題を挙げていきたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点

コーディネーター：荒井 弘和（法政大学）、須甲 理生（日本女子体育大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場6 (Zoom)

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点について、4つの視点（①体育・スポーツ系大学、②一般大学、③女子学生、④UNIVAS）から議論する。具体的には、以下のような論点を考えている。体育・スポーツ系大学と一般大学には、それぞれどのような機能が求められており、両者はどのように連携すればよいのか。トップアスリート養成の拠点として大学が位置づくならば、どのような組織と、どのように協働することが期待されるのか。学生アスリートは、どのようなコーチから、どのようなコーチングを受けているのか。そして、そのコーチを取り巻く環境はどのようになっているのか。大幅な発展が見込まれている女子学生アスリートを取り巻く環境は、今後どのように変化してゆくのか。大学は、どのようなトップアスリートを養成すればよいのか。そしてそのために、大学はどのような支援を行うべきなのか。

批判的でありつつも、前向きに、そして専門領域の越境を恐れぬシームレスな対話を期待したい。

15:45 ～ 16:15

[競技スポーツ-SA-2]一般大学の視点から

*田原 陽介¹ (1. 青山学院大学)

<演者略歴>

青山学院大学 コミュニティ人間科学部 准教授 陸上競技部短距離ブロック コーチ。

日本オリンピック委員会強化スタッフ(マネジメント)。

日本陸上競技連盟 ダイヤモンドアスリート コーディネーター。

2012年に EUが、デュアルキャリアをはじめて提唱してから、日本でも「スポーツ振興計画」にて、デュアルキャリアの理解が進んできた。アスリートの多様な社会進出を支えるには、アスリートの大学進学においては、体育・スポーツ系大学(学部)以外の選択肢も用意する必要があるが、同時にアスリートを養成する環境が問題となってくる。体育・スポーツ系大学(学部)は、スポーツ科学の研究施設、そしてトレーニング施設など、競技力推進のための施設を有しており、人的資源、情報資源も含めて国際競技力向上のための環境が整えられているケースが多い。一方で、体育・スポーツ系大学以外の一般大学においては、そのような環境が整っている大学ばかりではなく、学内のスポーツ資源はもとより学外との連携も必要となってくる。

本報告では、一般大学がトップアスリートの養成についてどのような現状や課題を有しているのか、いくつかの大学を事例に考察したい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点

コーディネーター：荒井 弘和（法政大学）、須甲 理生（日本女子体育大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場6 (Zoom)

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点について、4つの視点（①体育・スポーツ系大学、②一般大学、③女子学生、④UNIVAS）から議論する。具体的には、以下のような論点を考えている。体育・スポーツ系大学と一般大学には、それぞれどのような機能が求められており、両者はどのように連携すればよいのか。トップアスリート養成の拠点として大学が位置づくならば、どのような組織と、どのように協働することが期待されるのか。学生アスリートは、どのようなコーチから、どのようなコーチングを受けているのか。そして、そのコーチを取り巻く環境はどのようになっているのか。大幅な発展が見込まれている女子学生アスリートを取り巻く環境は、今後どのように変化してゆくのか。大学は、どのようなトップアスリートを養成すればよいのか。そしてそのために、大学はどのような支援を行うべきなのか。

批判的でありつつも、前向きに、そして専門領域の越境を恐れぬシームレスな対話を期待したい。

16:15 ～ 16:45

[競技スポーツ-SA-3]女子学生のトップアスリート養成の視点から

*川本 竜史¹ (1. 大東文化大学)

<演者略歴>

慶應義塾大学環境情報学部卒（1996年）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了（2001年）、大東文化大学スポーツ・健康科学部講師（2005年～）、教授（2016年～現在に至る）、（一財）全日本大学女子サッカー連盟理事長（2014年～現在に至る）。

2011年ドイツワールドカップの優勝によって一躍注目を浴びた女子サッカー。2021年9月には日本初のプロリーグである WEリーグが開幕する。一方、女子サッカー部のある大学は全国でも90校程度であり、登録選手数も2,000名程度という現状にある。Jリーグ選手や日本代表選手を数多く輩出している男子と比べると足元にも及ばない。大学が女子サッカーの普及・発展に更なる貢献を果たすための方向性と方法について、皆さまとともに考えたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点

コーディネーター：荒井 弘和（法政大学）、須甲 理生（日本女子体育大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場6 (Zoom)

本シンポジウムでは、トップアスリート養成の拠点としての大学の意義と問題点について、4つの視点（①体育・スポーツ系大学、②一般大学、③女子学生、④UNIVAS）から議論する。具体的には、以下のような論点を考えている。体育・スポーツ系大学と一般大学には、それぞれどのような機能が求められており、両者はどのように連携すればよいのか。トップアスリート養成の拠点として大学が位置づくならば、どのような組織と、どのように協働することが期待されるのか。学生アスリートは、どのようなコーチから、どのようなコーチングを受けているのか。そして、そのコーチを取り巻く環境はどのようにになっているのか。大幅な発展が見込まれている女子学生アスリートを取り巻く環境は、今後どのように変化してゆくのか。大学は、どのようなトップアスリートを養成すればよいのか。そしてそのために、大学はどのような支援を行うべきなのか。

批判的でありつつも、前向きに、そして専門領域の越境を恐れぬシームレスな対話を期待したい。

16:45 ～ 17:15

[競技スポーツ-SA-4]UNIVASの視点から

*谷釜 尋徳¹ (1. 東洋大学)

<演者略歴>

東洋大学 法学部 教授。

UNIVAS（一般社団法人 大学スポーツ協会）デュアルキャリア委員会 研修部会員。

歴史的にみて、日本の大学は「トップアスリート養成の拠点」としての機能を担ってきた。今日においても、大学在学中に国際舞台にチャレンジするアスリートは多く、大学で蓄えた競技力をもって卒業後に華々しく活躍する例も少なくない。

しかしながら、学生アスリートは、競技面のほかにも学業との両立やキャリア形成をはじめ、在学中に種々の問題に直面しているのが現状である。今後も、大学スポーツがトップアスリート養成の拠点たりえるには、解決すべき課題が山積しているといえよう。

2019年に発足した UNIVAS（大学スポーツ協会）は、大学スポーツを総合的に振興すべく誕生した競技横断的な組織である。UNIVASは、「卓越性を有する人材の育成」を理念の一つに掲げ、トップアスリートを含めたすべての学生アスリートを対象に、様々なサポート事業を展開している。

本報告では、大学がトップアスリート養成というテーマとどのように向き合っていくべきなのか、大学スポーツを俯瞰的に捉える UNIVASの視点から考察したい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

■ 2021年9月7日(火) 15:15 ~ 17:15 | 会場7 Zoom

生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／共生社会と生涯スポーツは共存できるのか：スポーツのパラダイムチェンジが共存への鍵

コーディネーター：内田 匡輔（東海大学）

本テーマ研究部会では、「生涯スポーツ」と「共生社会」を軸に検討し、「共生社会」の捉え方が漠然としているのではないかという結論を得た。そこでまず「共生社会」とはどのようなものかという、根本的な話し合いを持つことを目的に企画している。その上で、共生社会において生涯スポーツは、どのような機能を果たすのかを検討する必要があると考えた。テーマにある「共存できるのか」には、生涯スポーツが共生社会で果たす役割や、具体的に何ができるのか、またはできないのかを含め問い直す意味を込めている。

このような趣旨を踏まえ、パラリンピック後の共生社会について、筑波大学の菊幸一氏から発表をいただく。次に、NPO法人スマイルクラブ代表、大浜三平氏から、誰もが地域でスポーツを楽しめる環境づくりと共生社会についてお話をいただく。重ねて、東京未来大学の藤後悦子氏から、スポーツの指導現場で起こっている様々な壁や問題について保護者の視点から、共生社会の理想と現実についてお話をいただく。

発表を踏まえ、共生社会と生涯スポーツの共存について意見交換し、どのようなスポーツのパラダイムチェンジが、具体的に必要となるのかについて討議を深めてゆく。

15:15 ~ 15:55

[生涯スポーツ-SA-1] 身体と共生社会

スポーツのパラダイムチェンジに向けて

*菊 幸一¹ (1. 筑波大学)

15:55 ~ 16:35

[生涯スポーツ-SA-2] 共生社会実現を目指す、総合型地域スポーツクラブ事例報告

*大浜 三平¹ (1. NPO法人スマイルクラブ)

16:35 ~ 17:15

[生涯スポーツ-SA-3] 子どもも親も安心できるスポーツ環境の構築へ向けて

*藤後 悦子¹ (1. 東京未来大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題 A】 テーマ別シンポジウム／共生社会と生涯スポーツは共存できるのか：スポーツのパラダイムチェンジが共存への鍵

コーディネーター：内田 匡輔（東海大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場7 (Zoom)

本テーマ研究部会では、「生涯スポーツ」と「共生社会」を軸に検討し、「共生社会」の捉え方が漠然としているのではないかという結論を得た。そこでまず「共生社会」とはどのようなものかという、根本的な話し合いを持つことを目的に企画している。その上で、共生社会において生涯スポーツは、どのような機能を果たすのかを検討する必要があると考えた。テーマにある「共存できるのか」には、生涯スポーツが共生社会で果たす役割や、具体的に何ができるのか、またはできないのかを含め問い直す意味を込めている。

このような趣旨を踏まえ、パラリンピック後の共生社会について、筑波大学の菊幸一氏から発表をいただく。次に、NPO法人スマイルクラブ代表、大浜三平氏から、誰もが地域でスポーツを楽しめる環境づくりと共生社会についてお話をいただく。重ねて、東京未来大学の篠後悦子氏から、スポーツの指導現場で起こっている様々な壁や問題について保護者の視点から、共生社会の理想と現実についてお話をいただく。

発表を踏まえ、共生社会と生涯スポーツの共存について意見交換し、どのようなスポーツのパラダイムチェンジが、具体的に必要となるのかについて討議を深めてゆく。

15:15 ～ 15:55

[生涯スポーツ-SA-1]身体と共生社会

スポーツのパラダイムチェンジに向けて

*菊 幸一¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

1957年富山県生まれ。筑波大学大学院博士課程体育科学研究科単位取得退学。体育社会学、スポーツ社会学を専攻。九州大学、奈良女子大学を経て、現在、筑波大学体育系教授。教育学博士（筑波大学）。日本体育・スポーツ・健康学会副会長、日本スポーツ社会学会会長、文部科学省学習指導要領作成協力者（高校保健体育、座長）など。

近代スポーツは、それまでのスポーツと異なり、明らかに自由な身体を「あえて」不自由（＝障害者）にするルール（拘束）を設けることで、身体の楽しさを安全な状態で長引かせる享受の仕方として発明された。それが特権階級（レジャークラス）から労働者階級まで、等しく享受されるべきであるとするのが「みんなのスポーツ」である。これに対して、生涯スポーツは、その身体の不自由さの許容範囲をライフステージに応じて自由に改変し、スポーツの自己目的的な楽しさ享受自体が、全生涯にわたる自己開発享受につながる自発的な学習を導くとする概念である。そこでは、結果を求めているながら、その過程自体を重視するパラダイムが生まれる。共生社会とは、誰しもが、どのような年齢や環境においてもそのような学習が保障されることを認め合い、QOLを実現する楽しさを共に享受する社会であるとすれば、生涯スポーツにおけるスポーツの概念自体がそれを内包していると考えることができよう。したがって、ここでの議論は、現代スポーツが、なぜ競争の結果のみを社会的に重要視し、本来の共生社会を実現する社会的パラダイムを見失うことになったのかを明らかにすることである。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題 A】 テーマ別シンポジウム／共生社会と生涯スポーツは共存できるのか：スポーツのパラダイムチェンジが共存への鍵

コーディネーター：内田 匡輔（東海大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場7 (Zoom)

本テーマ研究部会では、「生涯スポーツ」と「共生社会」を軸に検討し、「共生社会」の捉え方が漠然としているのではないかと結論を得た。そこでまず「共生社会」とはどういうものかという、根本的な話し合いを持つことを目的に企画している。その上で、共生社会において生涯スポーツは、どのような機能を果たすのかを検討する必要があると考えた。テーマにある「共存できるのか」には、生涯スポーツが共生社会で果たす役割や、具体的に何ができるのか、またはできないのかを含め問い直す意味を込めている。

このような趣旨を踏まえ、パラリンピック後の共生社会について、筑波大学の菊幸一氏から発表をいただく。次に、NPO法人スマイルクラブ代表、大浜三平氏から、誰もが地域でスポーツを楽しめる環境づくりと共生社会についてお話をいただく。重ねて、東京未来大学の篠後悦子氏から、スポーツの指導現場で起こっている様々な壁や問題について保護者の視点から、共生社会の理想と現実についてお話をいただく。

発表を踏まえ、共生社会と生涯スポーツの共存について意見交換し、どのようなスポーツのパラダイムチェンジが、具体的に必要となるのかについて討議を深めてゆく。

15:55 ～ 16:35

[生涯スポーツ-SA-2]共生社会実現を目指す、総合型地域スポーツクラブ事例報告

*大浜 三平¹ (1. NPO法人スマイルクラブ)

<演者略歴>

筑波大学大学院修士（スポーツ学）、NPO法人スマイルクラブ理事、バレーボール国際公認コーチ。

スマイルクラブはもともと体育教師であった理事長大浜あつ子が、自閉症児の母親から「学校の体育授業についていけないので、自分の子どもを見てくれませんか？」との依頼から2000年に NPO（兼 文科省の総合型地域スポーツクラブ）としてスタートし、主に発達障がい者（児含む）を対象に運動やスポーツによる社会的自立を目的として運動教室「運動が苦手な子の教室（以下 「苦手教室」）」（学校体育館等で実施）をおこなってきた。またバレーボールを大学まで実践してきたこともあり、一般のバレーボール種目を中心としたスポーツ教室もスタートし、元オリンピック選手もコーチとして教室指導に携わっていただいている。現在は、バレーボールのほかに、バスケットボールやバドミントン種目も追加し、教室も開催している。

2016年から新たに放課後等デイサービス事業（障がい者の個別運動指導に特化した事業）もスタートし、現在約400人（苦手教室約200人、放課後等デイサービス事業約200人 計400人）の障がい者が在籍し、毎日スポーツや運動を楽しんでいる。

このような、障がいのあるなしに関わらず、多様なスポーツを楽しめる環境づくりを進めるには何が必要となるのかを議論していきたい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題A】 共生社会の実現に向けた生涯スポーツ政策と協働システムをいかに構築するか

生涯スポーツ研究部会【課題 A】 テーマ別シンポジウム／共生社会と生涯スポーツは共存できるのか：スポーツのパラダイムチェンジが共存への鍵

コーディネーター：内田 匡輔（東海大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場7 (Zoom)

本テーマ研究部会では、「生涯スポーツ」と「共生社会」を軸に検討し、「共生社会」の捉え方が漠然としているのではないかという結論を得た。そこでまず「共生社会」とはどういうものかという、根本的な話し合いを持つことを目的に企画している。その上で、共生社会において生涯スポーツは、どのような機能を果たすのかを検討する必要があると考えた。テーマにある「共存できるのか」には、生涯スポーツが共生社会で果たす役割や、具体的に何ができるのか、またはできないのかを含め問い直す意味を込めている。

このような趣旨を踏まえ、パラリンピック後の共生社会について、筑波大学の菊幸一氏から発表をいただく。次に、NPO法人スマイルクラブ代表、大浜三平氏から、誰もが地域でスポーツを楽しめる環境づくりと共生社会についてお話をいただく。重ねて、東京未来大学の篠後悦子氏から、スポーツの指導現場で起こっている様々な壁や問題について保護者の視点から、共生社会の理想と現実についてお話をいただく。

発表を踏まえ、共生社会と生涯スポーツの共存について意見交換し、どのようなスポーツのパラダイムチェンジが、具体的に必要となるのかについて討議を深めてゆく。

16:35 ～ 17:15

[生涯スポーツ-SA-3]子どもも親も安心できるスポーツ環境の構築へ向けて

*藤後 悦子¹ (1. 東京未来大学)

<演者略歴>

福岡県出身。筑波大学教育研究科修了、東京学芸大学大学院単位修得満期退学。筑波大学にて博士号を取得。公認心理師、臨床心理士、臨床発達心理士。現在、東京未来大学こども心理学部教授。新宿区社会教育委員、足立区区民評価委員会副会長、足立区文化・読書・スポーツ推進委員会副会長（運動・スポーツ部会会長）。日本中学校体育連盟の研修、民間スポーツ団体でのペアレント教室や心理サポートなどを担当してきた。

生涯スポーツの入り口となるジュニア期のスポーツの受け皿としては、地域スポーツの役割が大きい。地域スポーツは、一般的に入会制限などはなく、特別な配慮が必要な子ども達も多く参加している。地域スポーツへの参加は、親の支えになしには成り立たず、練習や試合会場への送迎、当番、応援など様々な場面で親は子どものスポーツに関わっていく。そのため地域スポーツの場では、指導者と子どもとの関係のみでなく、親と子どもの関係、応援席の親集団と子どもとの関係、親同士の関係、子ども同士の関係など多層的な人間関係が交差する。そこには多様なニーズや価値観も存在することとなる。本来であれば、多様なニーズに対応できるスポーツ環境を整える必要があるが、勝利至上主義に傾くことで、技術力が低い子どもや配慮が必要な子がスケープゴートになりやすい。

3人の子どもの親として地域スポーツに関わってきた経験や、臨床心理士としての相談活動を通して、スポーツの魅力を実感するとともに課題とも直面してきた。演者らが行ってきた研究結果や実践をもとに、親も子も安心できるスポーツ環境を構築するためには何が必要であるのかを議論していきたい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

■ 2021年9月7日(火) 15:15 ~ 17:15 | 会場8 Zoom

健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方：「女」を生きることと健康・スポーツ

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学）、木塚 朝博（筑波大学）

これまで健康や体力を語る際を中心であった「青年・壮年期の健常男性」に対し、多様なライフスタイルやライフコースを念頭において、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えることが狙いである。特に、“「女」を生きることと健康・スポーツ”というサブタイトルのもと、ジェンダー／セックスとしての女性のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてる。その際、まずは自然科学および社会科学の立場から女性に特有のスポーツ参加および健康増進の現状や展望を明確化する。さらに、競技を続けながら「女」を生きることの困難や価値について、当事者の生きられた経験や現場での課題を踏まえつつ、議論を深めていく。

15:15 ~ 15:55

[健康福祉-SA-1] 女性の運動・スポーツ実施

社会科学の立場から

*工藤 保子¹ (1. 大東文化大学)

15:55 ~ 16:35

[健康福祉-SA-2] 発育発達、ライフスタイルに応じた女性アスリート支援

*山口 香¹ (1. 筑波大学)

16:35 ~ 17:15

[健康福祉-SA-3] スポーツを通じた女性のヘルスケアを考える

*能瀬 さやか¹ (1. 東京大学医学部附属病院 女性診療科・産科)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方：「女」を生きることと健康・スポーツ

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学）、木塚 朝博（筑波大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場8 (Zoom)

これまで健康や体力を語る際の中心であった「青年・壮年期の健常男性」に対し、多様なライフスタイルやライフコースを念頭において、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えることが狙いである。特に、

“「女」を生きることと健康・スポーツ”というサブタイトルのもと、ジェンダー／セックスとしての女性のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてる。その際、まずは自然科学および社会科学の立場から女性に特有のスポーツ参加および健康増進の現状や展望を明確化する。さらに、競技を続けながら「女」を生きることの困難や価値について、当事者の生きられた経験や現場での課題を踏まえつつ、議論を深めていく。

15:15 ～ 15:55

[健康福祉-SA-1]女性の運動・スポーツ実施

社会科学の立場から

*工藤 保子¹ (1. 大東文化大学)

<演者略歴>

鹿屋体育大学大学院修了。2017年より現職。1991年4月から2017年3月まで笹川スポーツ財団に在席し、前項調査「スポーツライフ・データ」等に携わる。専門分野はスポーツ社会学。日本スポーツとジェンダー学会理事、一般社団法人 スポーツ・コンプライアンス教育振興機構理事、日本スポーツクラブ協会評議員等を現任。

改めて、8年前の2013年第64回大会（立命館大学）の過去大会から、本部企画や組織委員会企画、各専門領域のシンポジウムやキーノートレクチャーなどのタイトルを見返してみたところ、テーマに「女性」というキーワードが含まれていたのは、7年前の2014年第65回大会（岩手大学）、体育史専門領域のキーノートレクチャー「日本における女子体育教師史研究」の1題のみであった。しかしながら、現状の健康・スポーツ政策においては「女性の健康」や「スポーツを通じた女性の活躍促進」が課題とされている。

私からは、社会科学の立場から、成人女性の運動・スポーツ実施率の50年間の推移や、女児・女子の運動・スポーツ実施の現状も併せて紹介したい。また、健康の主観的評価や健康状態に関するデータも踏まえて、今後の展望など、問題提起を行いたい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方：「女」を生きることと健康・スポーツ

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学）、木塚 朝博（筑波大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場8 (Zoom)

これまで健康や体力を語る際の中心であった「青年・壮年期の健常男性」に対し、多様なライフスタイルやライフコースを念頭において、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えることが狙いである。特に、

“「女」を生きることと健康・スポーツ”というサブタイトルのもと、ジェンダー／セックスとしての女性のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてる。その際、まずは自然科学および社会科学の立場から女性に特有のスポーツ参加および健康増進の現状や展望を明確化する。さらに、競技を続けながら「女」を生きることの困難や価値について、当事者の生きられた経験や現場での課題を踏まえつつ、議論を深めていく。

15:55 ～ 16:35

[健康福祉-SA-2]発育発達、ライフスタイルに応じた女性アスリート支援

*山口 香¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

元女子柔道選手。世界女子柔道選手権（1984）で日本女子として初めて優勝。ソウル五輪(1988)では銅メダルを獲得。現役引退後は、指導者としてシドニー五輪(2000)、アテネ五輪(2004)のコーチを務めた。現在は、筑波大学で教鞭をとるかたわら、女性アスリート支援にも努めている。

スポーツ界では長年に渡り、女性アスリートの育成強化は、男子とは違う発育発達や生理的な機能等に特化して行われてはこなかった。また、競技を継続しながら女性特有のライフイベントである妊娠・出産を迎えることも希少であった。指導者の多くが男性であることから、競技を行う上での女性特有の問題を意識せずに指導が行われたり、アスリートも相談しづらい環境でもあった。日本における女性アスリートの競技力は年々向上しているが、男性に比べて競技を行う環境やサポート体制には依然として課題が残る。女兒や一般女性のスポーツ実施率も低いことも問題視されている。女性アスリートへの支援から女性全体がスポーツを生涯にわたって親しむための環境、サポートについて考えたい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題A】健康増進につながる体力・運動の在り方をいかに考えるか

健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／ライフスタイルに応じた健康増進・体力向上の捉え方：「女」を生きることと健康・スポーツ

コーディネーター：高尾 将幸（東海大学）、木塚 朝博（筑波大学）

2021年9月7日(火) 15:15 ～ 17:15 会場8 (Zoom)

これまで健康や体力を語る際の中心であった「青年・壮年期の健常男性」に対し、多様なライフスタイルやライフコースを念頭において、これからの健康増進や体力向上のあり方を考えることが狙いである。特に、

“「女」を生きることと健康・スポーツ”というサブタイトルのもと、ジェンダー／セックスとしての女性のスポーツ経験や健康増進のあり方に焦点をあてる。その際、まずは自然科学および社会科学の立場から女性に特有のスポーツ参加および健康増進の現状や展望を明確化する。さらに、競技を続けながら「女」を生きることの困難や価値について、当事者の生きられた経験や現場での課題を踏まえつつ、議論を深めていく。

16:35 ～ 17:15

[健康福祉-SA-3]スポーツを通じた女性のヘルスケアを考える

*能瀬 さやか¹ (1. 東京大学医学部附属病院 女性診療科・産科)

＜演者略歴＞

2003年北里大学医学部卒業、2006年東京大学産婦人科学教室入局後、関連病院で研修、2012年～2017年国立スポーツ科学センターメディカルセンター勤務、2017年～東京大学医学部附属病院 女性診療科・産科勤務となり同年女性アスリート外来開設、国立スポーツ科学センタースポーツメディカルセンター婦人科非常勤。

スポーツは思春期から性成熟期、さらに更年期、高齢期の女性のヘルスケアにおいて身体機能の維持、増進に大きく貢献する。また、骨粗鬆症や糖尿病、妊娠高血圧症候群等の疾病に対し、予防医学の観点からも医療や社会の生産性に大きな役割を担うと考えられる。しかし、日常の臨床において、適切な医学的知識の不足によりスポーツに参加する女性の健康がかえって害されているケースも少なくない。当科では、2017年4月より女性アスリート外来を開設しているが、受診する選手のもっとも多い主訴は、利用可能エネルギー不足による無月経である。若年アスリートにおいて無月経や低体重、摂食障害、骨粗鬆症と診断され、生涯にわたり治療が必要となるケースもみられる。これらの課題解決に向けて、10代からの継続したヘルスケア教育とスクリーニング体制の構築、医療機関への受診環境整備が課題である。

本講演では、スポーツが女性のヘルスケアにどのように貢献できるかをライフステージ毎に考えるとともに、過度なスポーツによる健康問題の現状について紹介する。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

■ 2021年9月8日(水) 10:45 ~ 12:45 | 会場2 Zoom

スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／スポーツの理想とその暴力性：多様なスポーツ文化の醸成へ向けたスポーツ研究の自己反省

コーディネーター：高尾 尚平（日本体育大学）、山口 理恵子（城西大学）

本企画の主題は、体育学に関する学問論的省察である。この省察は、スポーツと多様性の問題に対する1つの応答である。本企画では、多様性を排除する力を暴力性と呼ぶ。暴力性は、スポーツの理想を語ることと表裏一体の関係にある。クーベルタンが掲げたオリンピックの理想は、女性を競技の外側に位置づけるものであったし、スポーツの公平性を基礎づける「自然な身体」という理想は、「不自然」と見做された身体を排除する力となっている。こうした暴力性が明るみにされてきたいま、スポーツにおける多様性の尊重は、学問的課題となりつつある。だが、学問もまた、暴力性と無縁ではない。たとえば、学問が近代スポーツの超克を理念として掲げれば、その批判の矛先に含まれる多様な現実を「近代スポーツ」という観念に包摂する暴力性が生じる。また、スポーツ科学への過度な価値づけは、実践のアクチュアリティを捨象する暴力性にもなりうる。学問的営為は、自らの暴力性への自覚を欠くとき、多様性を排除する機構になりかねない。そこで本企画では、暴力性を視座としつつ、専門領域を交差する対話から、既存の体育学のパラダイムや制度設計に潜む課題を省察する。

10:45 ~ 11:25

[スポーツ文化-SB-1] スポーツ文化論の展開と学問論

*樋口 聡¹ (1. なし（広島大学名誉教授）)

11:25 ~ 12:05

[スポーツ文化-SB-2] スポーツをめぐる政策展開の10年とアカデミア

*清水 諭¹ (1. 筑波大学)

12:05 ~ 12:45

[スポーツ文化-SB-3] スポーツ科学の学際性・総合性とは
問題の共有から解決の共有に向けて

*森丘 保典¹ (1. 日本大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／スポーツの理想とその暴力性：多様なスポーツ文化の醸成へ向けたスポーツ研究の自己反省

コーディネーター：高尾 尚平（日本体育大学）、山口 理恵子（城西大学）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:45 会場2 (Zoom)

本企画の主題は、体育学に関する学問論的省察である。この省察は、スポーツと多様性の問題に対する1つの応答である。本企画では、多様性を排除する力を暴力性と呼ぶ。暴力性は、スポーツの理想を語ることと表裏一体の関係にある。クーベルタンが掲げたオリンピックの理想は、女性を競技の外側に位置づけるものであったし、スポーツの公平性を基礎づける「自然な身体」という理想は、「不自然」と見做された身体を排除する力となっている。こうした暴力性が明るみにされてきたいま、スポーツにおける多様性の尊重は、学問的課題となりつつある。だが、学問もまた、暴力性と無縁ではない。たとえば、学問が近代スポーツの超克を理念として掲げれば、その批判の矛先に含まれる多様な現実を「近代スポーツ」という観念に包摂する暴力性が生じる。また、スポーツ科学への過度な価値づけは、実践のアクチュアリティを捨象する暴力性にもなりうる。学問的営為は、自らの暴力性への自覚を欠くとき、多様性を排除する機構になりかねない。そこで本企画では、暴力性を視座としつつ、専門領域を交差する対話から、既存の体育学のパラダイムや制度設計に潜む課題を省察する。

10:45 ～ 11:25

[スポーツ文化-SB-1]スポーツ文化論の展開と学問論

*樋口 聡¹ (1. なし（広島大学名誉教授）)

<演者略歴>

筑波大学体育専門学群卒業（一期生）。筑波大学大学院博士課程体育科学研究科修了。教育学博士。広島大学名誉教授。著書に『スポーツの美学』『遊戯する身体』『身体教育の思想』『教育の思想と原理』『教育における身体知研究序説』Somaesthetics and the Philosophy of Culture: Projects in Japan (Routledge)など多数。

スポーツ文化論の展開を学問論的に批判するための問題のいくつかを、私のこれまでの研究から指摘してみよう。そこに見られる「批判」という視点は、もちろん「非難」とは異なり、ものごとを別の角度から見直すことを意味するものである。それは、当たり前になっている言説に立ち止まり、それを疑い、違った言説を編み直すことを促す。その批判精神が、私の「スポーツ科学論序説」ほかとして形になった。西洋学の典型的存在である美術史学の内部に、或る対象を芸術と認定しそれ以外は非芸術として抹殺する学問的暴力の行使を見出すことができる。この学問の暴力性は不可避であり、スポーツ科学や体育学においてもありえ、その背後に働く力学を測定する一種の「政治学」が要請される。史料に基づいた客観的歴史などという観念を超えた、私たちの生き方に迫ろうとする歴史研究の姿が、スポーツ科学論序説からは導かれる。それは「歴史」という領域を越えていく。また、学校教育の授業研究のあり方にも一石を投じることになる。科学批判としての「スポーツ科学の限界」の指摘が、スポーツ科学（体育学）の外部の研究者によってなされていることに目を向けなければならない。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／スポーツの理想とその暴力性：多様なスポーツ文化の醸成へ向けたスポーツ研究の自己反省

コーディネーター：高尾 尚平（日本体育大学）、山口 理恵子（城西大学）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:45 会場2 (Zoom)

本企画の主題は、体育学に関する学問論的省察である。この省察は、スポーツと多様性の問題に対する1つの応答である。本企画では、多様性を排除する力を暴力性と呼ぶ。暴力性は、スポーツの理想を語ることと表裏一体の関係にある。クーベルタンが掲げたオリンピックの理想は、女性を競技の外側に位置づけるものであったし、スポーツの公平性を基礎づける「自然な身体」という理想は、「不自然」と見做された身体を排除する力となっている。こうした暴力性が明るみにされてきたいま、スポーツにおける多様性の尊重は、学問的課題となりつつある。だが、学問もまた、暴力性と無縁ではない。たとえば、学問が近代スポーツの超克を理念として掲げれば、その批判の矛先に含まれる多様な現実を「近代スポーツ」という観念に包摂する暴力性が生じる。また、スポーツ科学への過度な価値づけは、実践のアクチュアリティを捨象する暴力性にもなりうる。学問的営為は、自らの暴力性への自覚を欠くとき、多様性を排除する機構になりかねない。そこで本企画では、暴力性を視座としつつ、専門領域を交差する対話から、既存の体育学のパラダイムや制度設計に潜む課題を省察する。

11:25 ～ 12:05

[スポーツ文化-SB-2]スポーツをめぐる政策展開の10年とアカデミア

*清水 諭¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

1991年3月筑波大学大学院博士課程体育科学研究科修了（教育学博士）。同年12月筑波大学講師体育科学系。現在、同体育系教授。甲子園野球、浦和レッズサポーター、オリンピックに関する文化社会学のほか、身体文化の歴史的研究を行っている。1999年11月の創刊以来『現代スポーツ評論』（創文企画）の編集に携わってきた。

暴力とはある者（機関）の権力行使によって、人々の生きる権利及び自由、そして生活を奪うことである。また、その過程において犠牲者や排除者が再生産される。アカデミアは、その知と実践により、暴力の状況を関知し、非暴力の解決策を講じ、ひとたび秩序（規則、制度等）が成立しても、次なる暴力の発生を関知し、改革が継続されるよう人々に促す役割をもつ。

本発表では、東日本大震災と福島第一原子力発電所の崩壊ののち、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以後、東京2020大会）の開催立候補を決定した2011年から2021年までのスポーツ界を振り返り、国／地方／地域社会／大学等の各レベルで何が行われてきたのかを追ひ、アカデミアの可能性を考える。

2013年9月6日に東京2020大会の開催が決定し、日本政府は” Sport for Tomorrow Project” を世界に向けて公言し、「スポーツを通じた国際貢献」を明確にした政策を打ち出し、2016年7月には TOCOGが「東京2020アクション&レガシープラン2016」を発表している。さらにガバナンスコードを策定したものの、人権に関する問題は継続的に浮上している。アカデミアは暴力を回避する術を提示することができるのだろうか。それはいつ、どのように、何を対象にして議論し、実践することによってなのだろうか。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題B】人々の生活に根ざした多様なスポーツ文化をいかに醸成していくか

スポーツ文化研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／スポーツの理想とその暴力性：多様なスポーツ文化の醸成へ向けたスポーツ研究の自己反省

コーディネーター：高尾 尚平（日本体育大学）、山口 理恵子（城西大学）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:45 会場2 (Zoom)

本企画の主題は、体育学に関する学問論的省察である。この省察は、スポーツと多様性の問題に対する1つの応答である。本企画では、多様性を排除する力を暴力性と呼ぶ。暴力性は、スポーツの理想を語ることと表裏一体の関係にある。クーベルタンが掲げたオリンピックの理想は、女性を競技の外側に位置づけるものであったし、スポーツの公平性を基礎づける「自然な身体」という理想は、「不自然」と見做された身体を排除する力となっている。こうした暴力性が明るみにされてきたいま、スポーツにおける多様性の尊重は、学問的課題となりつつある。だが、学問もまた、暴力性と無縁ではない。たとえば、学問が近代スポーツの超克を理念として掲げれば、その批判の矛先に含まれる多様な現実を「近代スポーツ」という観念に包摂する暴力性が生じる。また、スポーツ科学への過度な価値づけは、実践のアクチュアリティを捨象する暴力性にもなりうる。学問的営為は、自らの暴力性への自覚を欠くとき、多様性を排除する機構になりかねない。そこで本企画では、暴力性を視座としつつ、専門領域を交域する対話から、既存の体育学のパラダイムや制度設計に潜む課題を省察する。

12:05 ～ 12:45

[スポーツ文化-SB-3]スポーツ科学の学際性・総合性とは

問題の共有から解決の共有に向けて

*森丘 保典¹ (1. 日本大学)

<演者略歴>

筑波大学大学院体育研究科コーチ学専攻修了。公益財団法人日本体育協会スポーツ科学研究室・室長代理を経て現職。日本スポーツ協会国体委員会委員、日本陸上競技連盟科学委員会副委員長、強化委員会および指導者養成委員会委員、日本アンチ・ドーピング規律パネル委員、日本体育学会代議員、日本コーチング学会理事ほか。

いわゆる「スポーツ科学」の研究成果には、競技力の向上はもとより、スポーツによって得られる生きがいや楽しさ、学校体育の充実、健康増進や疾病予防、さらには地域社会の活性化などに関する問題解決や課題達成に貢献することが期待されているが、この種のメタな問題や課題が単一の学問分野に過不足なく収まることはほとんどないといってよいだろう。このことは、「根拠に基づく医療（Evidence-based Medicine：EBM）」が、研究によって得られた最良の科学的根拠と、臨床現場の状況（環境）や臨床家の技術・経験（専門性）、さらには患者の意向・行動（価値観）などを統合しながら、よりよい治療・ケアに向けた意志決定を行うための行動指針と定義づけられていることに通底するといえる。本シンポジウムでは、競技力向上に関する演者の拙い研究・サポート実践を自己反省のたたき台として、「問題の共有から解決の共有へ」というコンセプトを提示しながら、人文、社会および自然科学にまたがる幅広い学問分野で構成されている「スポーツ科学」の学際性・総合性のあり方について議論を深めてみたい。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

■ 2021年9月8日(水) 15:30 ~ 17:30 | 会場2 Zoom

スポーツ文化研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(1)：文化の保存・流通の批判的検討から

コーディネーター：深澤 浩洋（筑波大学）

指定討論者：來田 享子（中京大学）

本シンポジウムは、「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の1年目に当たるものである。社会環境の変化の中で、人々のスポーツ実践や文化的享受、それらを支える施策・政策に影響を及ぼしているのは、スポーツという文化に対する理解や捉え方、イメージ形成などであろう。それらを担うと考えられるスポーツ文化の保存や流通、促進をどのように考えていったらよいのか。シンポジウムの初年度では、多様な角度から批判的に検討し、今後議論を掘り下げていく上での課題や論点を浮かび上がらせてみたい。

15:30 ~ 16:10

[スポーツ文化-SC-1] スポーツ文化の保存と体育・スポーツ史研究
批判的検討から

*鈴木 明哲¹ (1. 東京学芸大学)

16:10 ~ 16:50

[スポーツ文化-SC-2] 無形文化財として応援団文化を保存する

*瀬戸 邦弘¹ (1. 鳥取大学)

16:50 ~ 17:30

[スポーツ文化-SC-3] スポーツ文化の伝え方を考える
メディア報道の立場から

*滝口 隆司¹ (1. 毎日新聞社)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(1)：文化の保存・流通の批判的検討から

コーディネーター：深澤 浩洋（筑波大学）

指定討論者：來田 享子（中京大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場2 (Zoom)

本シンポジウムは、「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の1年目に当たるものである。社会環境の変化の中で、人々のスポーツ実践や文化的享受、それらを支える施策・政策に影響を及ぼしているのは、スポーツという文化に対する理解や捉え方、イメージ形成などであろう。それらを担うと考えられるスポーツ文化の保存や流通、促進をどのように考えていったらよいのか。シンポジウムの初年度では、多様な角度から批判的に検討し、今後議論を掘り下げていく上での課題や論点を浮かび上がらせてみたい。

15:30 ～ 16:10

[スポーツ文化-SC-1]スポーツ文化の保存と体育・スポーツ史研究

批判的検討から

*鈴木 明哲¹ (1. 東京学芸大学)

<演者略歴>

東京学芸大学教育学部教授。博士（体育科学）。ヨーロッパスポーツ史学会（CESH）第64代フェロー。専門は体育・スポーツ史。かつては日本の体育・スポーツ史を戦間期、戦時下、戦後を対象時期として研究してきたが、現在は、戦後連合4カ国占領下オーストリアにおける体育・スポーツ史を研究している。

1960年に丹下保夫は「運動文化は保存できない」と記したが、まさに至言である。スポーツ文化を保存する術はない。同様に体育・スポーツ史研究もスポーツ文化の保存を目的とした学問ではない。しかし、体育・スポーツ史研究者のこれまでの仕事、そしてこれからの仕事が、スポーツ文化の保存に何らかの貢献をなすとして期待されている。果たして体育・スポーツ史研究は、スポーツ文化の保存に貢献できるのか、否か。その可能性を探るためには、これまでの体育・スポーツ史研究という仕事を、自戒を込めながら批判的に検討する必要がある。

そのためには、まずこれまでの研究スタイル（＝仕事）を素朴に一から見直さなければならない。すなわちそれは資史料をエビデンスに歴史を叙述し、著書や論文にまとめ上げ、これまでの通説となってきた歴史像を切り崩し、新たな歴史像を提示していくという、ごく当たり前に繰り返されてきた仕事を疑うことから始まる。研究の出発点は個々の研究者が抱く純粋な動機であり、資史料の渉猟を経て歴史像の再構築へと結実する。この過程を批判的に検討しながら、スポーツ文化の保存への可能性について報告する予定である。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(1)：文化の保存・流通の批判的検討から

コーディネーター：深澤 浩洋（筑波大学）

指定討論者：來田 享子（中京大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場2 (Zoom)

本シンポジウムは、「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の1年目に当たるものである。社会環境の変化の中で、人々のスポーツ実践や文化的享受、それらを支える施策・政策に影響を及ぼしているのは、スポーツという文化に対する理解や捉え方、イメージ形成などであろう。それらを担うと考えられるスポーツ文化の保存や流通、促進をどのように考えていったらよいのか。シンポジウムの初年度では、多様な角度から批判的に検討し、今後議論を掘り下げていく上での課題や論点を浮かび上がらせてみたい。

16:10 ～ 16:50

[スポーツ文化-SC-2]無形文化財として応援団文化を保存する

*瀬戸 邦弘¹ (1. 鳥取大学)

<演者略歴>

早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程満期退学。博士（人間科学）。専門はスポーツ人類学。早大助手、上智大学講師等を経て、現在は鳥取大学教育支援・国際交流推進機構 准教授。研究対象は岡山県の会陽文化、沖縄県の綱引き文化、旧制学校より伝わる応援団文化と、幅広く日本の身体文化に関して研究している。

スポーツ人類学とは、文化人類学の研究手法を取り入れてスポーツ文化の動態を研究する領域である。発表者も、これまでに多くの参与観察を実践し研究を進めてきたが、いつも直面するのがそのアーカイブの難しさである。スポーツ文化に限らず無形文化とは、常にフィールドの「刹那」の中に存在し、その動態を捉え考察するには「現在（いま）」を克明に記録する必要がある、重要な課題となる。本シンポジウムではその一例として応援団文化のアーカイブ実践を報告する事とする。発表者は長年に渡り応援団の文化研究を進めているが、その文化を学校空間にて生成された近代日本文化であり、ひとつの無形文化財と位置づけている。さて、昨年来猛威を振るう新型コロナウィルスは、応援団文化の継承にも大きな影響を及ぼしつつある。なぜなら、長引く活動停止は4年で文化継承者が入れ変わる学生活動団体においては、一層大きな問題となるからである。本発表では、対面による対外活動が制限される中での彼らの文化継承の「現在」に注目し、動き(カタ)のアーカイブを通じた文化継承に関して、これまでの研究実践を披露し、今後のスポーツ人類学の知の活用に向けて考えてみたい。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／スポーツ文化の浸透戦略(1)：文化の保存・流通の批判的検討から

コーディネーター：深澤 浩洋（筑波大学）

指定討論者：來田 享子（中京大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場2 (Zoom)

本シンポジウムは、「多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか」という課題認識のもと企画された3年計画の1年目に当たるものである。社会環境の変化の中で、人々のスポーツ実践や文化的享受、それらを支える施策・政策に影響を及ぼしているのは、スポーツという文化に対する理解や捉え方、イメージ形成などであろう。それらを担うと考えられるスポーツ文化の保存や流通、促進をどのように考えていったらよいのか。シンポジウムの初年度では、多様な角度から批判的に検討し、今後議論を掘り下げていく上での課題や論点を浮かび上がらせてみたい。

16:50 ～ 17:30

[スポーツ文化-SC-3]スポーツ文化の伝え方を考える

メディア報道の立場から

*滝口 隆司¹ (1. 毎日新聞社)

<演者略歴>

毎日新聞社論説委員（スポーツ担当）。1990年に入社し、運動部記者として4度のオリンピックのほか、野球、サッカー、大相撲など幅広く取材してきた。著書に『情報爆発時代のスポーツメディア』『スポーツ報道論』など。新聞連載「五輪の哲人 大島鎌吉物語」で2014年度のミズノスポーツライター賞優秀賞。

スポーツ報道の環境が「機械化」を余儀なくされている。2016年リオデジャネイロ五輪の頃から、人工知能（AI）を使って試合の結果を記者の手を介さずに報道する外国メディアが出てきた。日本でも2018年に朝日新聞が同社主催の夏の高校野球でAIに戦評を執筆させるシステムを開発し、今後、全国で本格導入する見通しという。

国内外を問わず、このような省力化が進む背景には、報道対象となるスポーツ分野の拡大や、スポーツ報道に携わる記者の削減があるとみられる。

2020年には新型コロナウイルスの感染拡大によって、取材環境はさらに変化を強いられた。現場での対面取材が制限されるようになり、代わって選手と接触せずにオンラインで取材する方式が主流となってきた。この状況はしばらく続きそうだ。

以前と同様、メディアはスポーツ情報を伝えることはできている。しかし、このような方法によって記事を作成・伝達することでどんな弊害が生まれるのか。スポーツを文化として世の中の人々に伝えることはできているのか。スポーツジャーナリズムの歴史にも触れながら、その意義や本来的な価値とは何かを考え、今後の報道のあり方を検討したい。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか**■ 2021年9月8日(水) 10:45 ~ 12:45 | 会場3 Zoom****学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える：コロナ禍の保健体育から、あらためてその意義と価値を整理する**

コーディネーター：高橋 和子（静岡産業大学）、細越 淳二（国士舘大学）

新型コロナウイルス感染症の拡大により、2020年以降、学校における体育・保健体育実践は、大きな変更や工夫を迫られることになった。その中で子どもたちの様子を振り返ると、子どもたちにとっての運動の意味や友達の存在、運動生活と衛生、運動と健康など、あらためて考えることも少なくなかったように思われる。

それらのことを踏まえて本シンポジウムでは、このコロナ禍の現状を踏まえて、あらためて子どもと運動・スポーツ、健康等の関係について考察し、子ども達にとってのこれからの体育・保健体育の意義と価値を整理するとともに、そのことを通して、今後のより良質な体育・保健体育実践の方向性や実践を考える契機とする。

10:45 ~ 11:15

[学校保健体育-SB-1] 新型コロナウイルス感染症への対応を通して考える体育、保健体育の充実に向けた視点

*関 伸夫¹ (1. スポーツ庁)

11:15 ~ 11:45

[学校保健体育-SB-2] コロナ禍の体育授業実践と今後の体育の在り方の展望

*永末 大輔¹ (1. 千葉大学教育学部附属小学校)

11:45 ~ 12:15

[学校保健体育-SB-3] 当事者として社会の課題に向き合う保健授業を目指して

*丸山 洋生¹ (1. 愛知県立瀬戸高等学校)

12:15 ~ 12:45

[学校保健体育-SB-4] コロナ禍における特別支援学校での体育実践から考えたこと

*鈴木 敏成¹ (1. 東京都立田無特別支援学校)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える：コロナ禍の保健体育から、あらためてその意義と価値を整理する

コーディネーター：高橋 和子（静岡産業大学）、細越 淳二（国士舘大学）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:45 会場3 (Zoom)

新型コロナウイルス感染症の拡大により、2020年以降、学校における体育・保健体育実践は、大きな変更や工夫を迫られることになった。その中で子どもたちの様子を振り返ると、子どもたちにとっての運動の意味や友達の存在、運動生活と衛生、運動と健康など、あらためて考えることも少なくなかったように思われる。

それらのことを踏まえて本シンポジウムでは、このコロナ禍の現状を踏まえて、あらためて子どもと運動・スポーツ、健康等の関係について考察し、子ども達にとってのこれからの体育・保健体育の意義と価値を整理するとともに、そのことを通して、今後のより良質な体育・保健体育実践の方向性や実践を考える契機とする。

10:45 ～ 11:15

[学校保健体育-SB-1]新型コロナウイルス感染症への対応を通して考える体育、保健体育の充実に向けた視点

*関 伸夫¹ (1. スポーツ庁)

<演者略歴>

東京都公立高等学校教諭

東京都教育庁指導主事

文部科学省スポーツ・青少年局生涯スポーツ課

スポーツ庁健康スポーツ課 課長補佐

スポーツ庁競技スポーツ課 課長補佐

スポーツ庁政策課 教科調査官

コロナ禍において子供たちは、学校の一斉臨時休業及び長期間にわたる自粛生活により、学校で学ぶ機会、身体活動、仲間と関わる機会などが減少することとなり、学びの保障や心と体への影響が危惧される状況となった。

しかしながら、そのような状況下においても学校では、学びを止めない、そして、教師と子供たちを、さらに子供同士をつなぎ続ける、という教師や行政機関等の必至の思いと行動により、多様な工夫や対応がなされ、それが現在も継続されている。

この間、国においても安全・安心な学校生活、学びの保障、児童生徒の体力低下対策などについて、様々な通知の発出、学習教材や指導資料の作成及び提供等を通して支援を行ってきた。体育、保健体育についても、関係者の英知を結集して、児童生徒の学びの保障を模索してきたが、同時に、これまでになかった視点から体育、保健体育を考えることにより、改めてその役割や課題が見えてきたのではないかと考えている。

これまでのコロナ禍における国の取組みを振り返り、今後の体育、保健体育の充実に向けた視点について、考えてみたい。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える：コロナ禍の保健体育から、あらためてその意義と価値を整理する

コーディネーター：高橋 和子（静岡産業大学）、細越 淳二（国士舘大学）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:45 会場3 (Zoom)

新型コロナウイルス感染症の拡大により、2020年以降、学校における体育・保健体育実践は、大きな変更や工夫を迫られることになった。その中で子どもたちの様子を振り返ると、子どもたちにとっての運動の意味や友達の存在、運動生活と衛生、運動と健康など、あらためて考えることも少なくなかったように思われる。

それらのことを踏まえて本シンポジウムでは、このコロナ禍の現状を踏まえて、あらためて子どもと運動・スポーツ、健康等の関係について考察し、子ども達にとってのこれからの体育・保健体育の意義と価値を整理するとともに、そのことを通して、今後のより良質な体育・保健体育実践の方向性や実践を考える契機とする。

11:15 ～ 11:45

[学校保健体育-SB-2] コロナ禍の体育授業実践と今後の体育の在り方の展望

*永末 大輔¹ (1. 千葉大学教育学部附属小学校)

<演者略歴>

- ・ 2005～2013 千葉県公立小学校
- ・ 2013～2017 東京学芸大学附属竹早小学校
- ・ 2017～ 千葉大学教育学部附属小学校

昨年2月末の一斉休校から現在（2021年5月）に至るまで、新型コロナウイルスの影響は学校生活のみならず、体育の学習においても、従前（ビフォーコロナ）のような、これまでの授業で当たり前のようにできていたことができなくなってしまった。体育で大切にしていた、身体接触を伴うかかわり合い（補助をしたり、グループで何かしたりすることを含む）もできなくなってしまった。くしくも昨年度から新指導要領が完全実施となり、「主体的・対話的で深い学び」が提唱され、授業自体の在り方も再構築していく必要を感じていた。

では、このような状況（時代の変革や状況も含め）で、どのような実践を積み重ねていくことが望ましいのであろうか。プログラミング教育、GIGAスクール構想によるICTの利活用、新型コロナ感染対策…。私自身が一人の実践者として、さまざまな要因を乗り越え、実践してきたことを紹介したい。具体的には、コロナ禍におけるこれまでの教育内容をどう実践したか、新しい技術（今回はスマートモビリティ）を活用した実践、プログラミング教育を体育に取り入れた実践の3点を紹介したい。それらの実践から、今後の体育の在り方を考えていきたい。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える：コロナ禍の保健体育から、あらためてその意義と価値を整理する

コーディネーター：高橋 和子（静岡産業大学）、細越 淳二（国士舘大学）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:45 会場3 (Zoom)

新型コロナウイルス感染症の拡大により、2020年以降、学校における体育・保健体育実践は、大きな変更や工夫を迫られることになった。その中で子どもたちの様子を振り返ると、子どもたちにとっての運動の意味や友達の存在、運動生活と衛生、運動と健康など、あらためて考えることも少なくなかったように思われる。

それらのことを踏まえて本シンポジウムでは、このコロナ禍の現状を踏まえて、あらためて子どもと運動・スポーツ、健康等の関係について考察し、子ども達にとってのこれからの体育・保健体育の意義と価値を整理するとともに、そのことを通して、今後のより良質な体育・保健体育実践の方向性や実践を考える契機とする。

11:45 ～ 12:15

[学校保健体育-SB-3]当事者として社会の課題に向き合う保健授業を目指して

*丸山 洋生¹ (1. 愛知県立瀬戸高等学校)

<演者略歴>

名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程修了。昭和61年愛知県公立学校教員、平成12年(財)愛知公園協会主事、平成14年(財)愛知県体育協会主査、平成17年愛知県教育委員会体育スポーツ課指導主事、平成19年同主査、平成22年愛知県立鳴海高等学校教頭、令和元年愛知県立瀬戸高等学校校長、現在に至る。

若者の無自覚な行動が、新型コロナウイルス感染症拡大の一因として指摘されている。このことは、健康で安全な生活を目指して行われてきたはずのこれまでの保健授業が、生徒の意思決定と行動選択に真に関与してきたか否かを、私たち保健体育教員に厳しく問いかけている。私たちは生徒に「感染症は遠く離れた教科書の中の出来事であり、社会的対策によって守られている自分には関係のないこと」と誤認させてきたのではないだろうか。

パンデミックが教科書の記述を超えて生徒の眼前に広がっている今日、「新型コロナウイルス感染症を学ぶ」ことにとどまらない、「新型コロナウイルス感染症で学ぶ」ための授業づくりが重要である。健康に関する原則に基づいて課題や情報を捉え、当事者としてリスク軽減のための個人の取組を考えたり、社会の取組に当事者として協力する態度を育てたりする教育活動は、未知の事態にも適切に対処する力を高めることが期待できる。ポスト・コロナの保健授業は、「社会に開かれた教育課程」や「カリキュラム・マネジメント」の視点を踏まえ、総合的な探究の時間や特別活動とも関連付けて、その充実を図っていく必要がある。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える：コロナ禍の保健体育から、あらためてその意義と価値を整理する

コーディネーター：高橋 和子（静岡産業大学）、細越 淳二（国士舘大学）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:45 会場3 (Zoom)

新型コロナウイルス感染症の拡大により、2020年以降、学校における体育・保健体育実践は、大きな変更や工夫を迫られることになった。その中で子どもたちの様子を振り返ると、子どもたちにとっての運動の意味や友達の存在、運動生活と衛生、運動と健康など、あらためて考えることも少なくなかったように思われる。

それらのことを踏まえて本シンポジウムでは、このコロナ禍の現状を踏まえて、あらためて子どもと運動・スポーツ、健康等の関係について考察し、子ども達にとってのこれからの体育・保健体育の意義と価値を整理するとともに、そのことを通して、今後のより良質な体育・保健体育実践の方向性や実践を考える契機とする。

12:15 ～ 12:45

[学校保健体育-SB-4]コロナ禍における特別支援学校での体育実践から考えたこと

*鈴木 敏成¹ (1. 東京都立田無特別支援学校)

<演者略歴>

東京都特別支援学校指導教諭

早稲田大学 大学院教育学研究科 修士課程修了、早稲田大学 社会安全政策研究所 招聘研究員

日本教師教育学会会員、日本アダプテッドスポーツ学会員

コロナ禍で、特別支援学校でも経験のしたことない様々な対応に追われている。勤務校(前任校)では昨年度のコロナ禍での休校期間に、オンラインで体を動かす動画を複数配信し、児童生徒や保護者から良い評価を得た。知的障害のある人の場合、身体を動かすことで得られる感覚刺激を沢山必要とする方が多数おり、自宅で気軽に身体を動かせるということは切実な願いであった。この経験を踏まえ、再度休校になりオンラインでの授業となることも想定して授業づくりをした。具体的にはピラティスやヨガなどのオンライントレーニングを参考にして、省スペースでできる運動を実施した。トレーニングマット上でできる運動を組み合わせ、動きにテーマを設けて生徒がテーマを意識しながら動くことで、主体的、対話的な学びとなるように工夫した。この授業では、運動に苦手意識の強い生徒も自己の身体と心に向かい合い、内観しながら体を動かす心地よさや楽しさを味わうことができた。

報告では、コロナ禍の限られた条件の中で、主体的・対話的で深い学びとしていかに授業づくりを行ったかを紹介し、そこで得た新たな知見から、これからの特別支援教育における体育の在り方を考えてみたい。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題C】体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2021年9月8日(水) 15:30 ~ 17:30 | 会場3 Zoom

学校保健体育研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導：学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離

コーディネーター：末永 祐介（東京女子体育大学）、柏木 悠（専修大学）

昭和世代から比べると子供たちの体力レベルは低水準であり、さらに体力の二極化が鮮明になり運動が苦手な子供が増加しているにも関わらず、学習指導要領の目指す動きや内容は、実情に合っていないこともあり、学校現場での子供の現状と指導要領の目指す姿を整理し、そのギャップに対応する今後の方針を他分野の専門的見解も交えながら論究する。

15:30 ~ 16:10

[学校保健体育-SC-1] 学習指導要領作成及び実施上の成果と課題

*白旗 和也¹ (1. 日本体育大学)

16:10 ~ 16:50

[学校保健体育-SC-2] 体育授業における教師と子どもの乖離

*佐藤 善人¹ (1. 東京学芸大学教育学部)

16:50 ~ 17:30

[学校保健体育-SC-3] 体育心理学の視野で捉えた基礎的運動能力の構造と保健体育の役割

*木島 章文¹ (1. 山梨大学教育学部)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導：学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離

コーディネーター：末永 祐介（東京女子体育大学）、柏木 悠（専修大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場3 (Zoom)

昭和世代から比べると子供たちの体力レベルは低水準であり、さらに体力の二極化が鮮明になり運動が苦手な子供が増加しているにも関わらず、学習指導要領の目指す動きや内容は、実情に合っていないこともあり、学校現場での子供の現状と指導要領の目指す姿を整理し、そのギャップに対応する今後の方針を他分野の専門的見解も交えながら論究する。

15:30 ～ 16:10

[学校保健体育-SC-1]学習指導要領作成及び実施上の成果と課題

*白旗 和也¹ (1. 日本体育大学)

<演者略歴>

小学校教諭、副校長、教育委員会指導主事、文部科学省体育科教科調査官、国立教育政策研究所教育課程調査官を経て現職。体育指導における教師効力感を高めるための研究を進めている。また、JICA体育分野技術顧問として、アフリカ、大洋州を中心とした開発途上国の体育普及に携わっている。

学習指導要領の役割は、「公の性質を有する学校における教育水準を全国的に確保することである。（学習指導要領前文）」と示されている。そのため、各学校が創意工夫できるよう大綱的に示されている。このことは、日本の学習指導要領の長所である一方、作成上の難点も併せ持つ。作成に当たっては、全国どの地域でも実現可能な内容であることが求められる。体育は、施設、設備、用具等への配慮が他教科以上に必要である。次に発達の段階への配慮である。小学校低学年で「運動遊び」としているのはその一例である。さらには教科である以上、他教科との整合が求められる。特に現行学習指導要領では、一層、その性格が明確となっている。また実施上の課題もある。学習指導要領は、教師の指導すべき内容を規定したものであり、指導方法は学校の創意工夫に委ねられている。しかし、前学習指導要領が全面実施となった2011年に小学校教員を対象とした調査では、体育科の内容について「全くわからない」「あまりわからない」と回答した教員が約4分の3であった。これでは、学習指導要領の改訂をしたところで、趣旨の実現はほど遠いと言わざるを得ない。周知方法の工夫が急務である。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導：学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離

コーディネーター：末永 祐介（東京女子体育大学）、柏木 悠（専修大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場3 (Zoom)

昭和世代から比べると子供たちの体力レベルは低水準であり、さらに体力の二極化が鮮明になり運動が苦手な子供が増加しているにも関わらず、学習指導要領の目指す動きや内容は、実情に合っていないこともあり、学校現場での子供の現状と指導要領の目指す姿を整理し、そのギャップに対応する今後の方針を他分野の専門的見解も交えながら論究する。

16:10 ～ 16:50

[学校保健体育-SC-2] 体育授業における教師と子どもの乖離

*佐藤 善人¹ (1. 東京学芸大学教育学部)

<演者略歴>

小中学校教諭として13年勤務した後、岐阜聖徳学園大学教育学部を経て現職。学校期における持久走・長距離走や運動遊びを対象に授業研究を進めている。2016年秩父宮記念スポーツ医科学奨励賞、2021年ランニング学会学会賞を受賞。

日々体育授業は行われているが、教師が教えようとするのと、学ぶ子どもの思いにはズレが生じているように思われる。例えば、教師は対話的な学習を求めて、グループでの話し合いの場を設定するが、子どもに話し合う必要感は存在していないことがある。また、教師は持久走において子どもの全身持久力を向上させたいと願い実践するが、子どもにとって全身持久力を高めることは重要なめあてとはなりにくい。こういったズレが生じる背景の一つには、教師に学習者の視点が欠けている問題がある。加えて、学習指導要領を絶対視することで、目の前の子どもの現実から授業づくりを出発することができない現状を指摘できる。結果として体育嫌い、運動嫌いを生んではいないだろうか。

豊かなスポーツライフの実現を目指す体育授業において、教師と子どもの思いのズレをどのように解消し、実践すればよいのか。運動・スポーツ実践の主体者としての子どもに対して、教師はどういったことを大切に指導すればよいのか。持久走・長距離走と運動遊び実践の研究成果をもとに具体的に考えてみたい。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題C】 体育・スポーツ健康科学は学校保健体育の進展にいかに関与できるか

学校保健体育研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／科学的エビデンスからみた保健体育のカリキュラムと学習指導：学習指導要領の内容と保健体育授業の実状との乖離

コーディネーター：末永 祐介（東京女子体育大学）、柏木 悠（専修大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場3 (Zoom)

昭和世代から比べると子供たちの体力レベルは低水準であり、さらに体力の二極化が鮮明になり運動が苦手な子供が増加しているにも関わらず、学習指導要領の目指す動きや内容は、実情に合っていないこともあり、学校現場での子供の現状と指導要領の目指す姿を整理し、そのギャップに対応する今後の方針を他分野の専門的見解も交えながら論究する。

16:50 ～ 17:30

[学校保健体育-SC-3] 体育心理学の視野で捉えた基礎的運動能力の構造と保健体育の役割

*木島 章文¹ (1. 山梨大学教育学部)

<演者略歴>

博士（体育科学）。研究課題はスポーツ動作における個人間協応の解析（Kijima et al., PLoS One, 2012 etc.）、全身移動を伴う個人間協応パタンの実験的再現（Kijima et al., Frontiers in Psychology, 2017）。2021年度より山梨大学教育学部小学校教員養成特別教育プログラムに授業担当教員として参加。

小学校と中学校の学習指導要領では、学年を縦系、運動領域を横系として授業内容が組み立てられている。そこに明記された小学校低学年の授業は遊びであり、中学年から技能学習を目的とした教科の体裁を帯びる。その後、高学年から中学校1-2年生でスポーツ種目の学習へと至り、中学校3年生において選択した種目の活動を自律的・主体的に運営することを期待される。

今回の会議ではまず現場の授業の様子を観察・報告し、その実態に応じて全体的な建て付けを再構築する心理学の考え方を提案する。それにあたり、まずは保健体育で育まれうる知性、ならびにその知性を育む教員と児童生徒の関わり方について認知発達の観点を起点として再考する。本来的にヒトには、他者と連携・協調しながら物理的に変動する動作環境を自由に動ける資質が備わっている。ただしその機能を立ち上げ、さらに発展させるには、物理的に大きな力を持ち、連携の仕方に高い見識を持つ教員が心理・物理的に関わる必要がある。日常生活において唐突に生じる物理的な環境変化を即座に見抜き、変動の時定数に合わせて自らの動作を調整する。この身体的知性を育む保健体育の方法論を体育心理学の観点から論じたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

📅 2021年9月8日(水) 10:45 ~ 12:45 | 📍 会場4 Zoom

競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／パラ競技スポーツにおけるコーチ養成の現状とこれから

コーディネーター：内田 若希（九州大学）、広瀬 統一（早稲田大学）

本シンポジウムではパラ競技スポーツのコーチ養成の現状と今後について、指導論、パスウェイ、養成システムの3つの観点から、それぞれの専門家からの情報提供をもとに議論する。この議論をもとに、競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか、ひいてはスポーツの価値を最大化するためのコーチの在り方についても検討する。

10:45 ~ 11:25

[競技スポーツ-SB-1] 車いすテニス日本代表監督に至るパスウェイとコーチとしての学び

*中澤 吉裕¹ (1. 有限会社エヌプランニング)

11:25 ~ 12:05

[競技スポーツ-SB-2] 日本におけるパラスポーツ指導者養成システムの現状と課題

*金子 元彦¹ (1. 東洋大学)

12:05 ~ 12:45

[競技スポーツ-SB-3] 世界のパラスポーツ指導における指導論の特徴

*伊藤 雅充¹ (1. 日本体育大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題B】 テーマ別シンポジウム／パラ競技スポーツにおけるコーチ養成の現状とこれから

コーディネーター：内田 若希（九州大学）、広瀬 統一（早稲田大学）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:45 会場4 (Zoom)

本シンポジウムではパラ競技スポーツのコーチ養成の現状と今後について、指導論、パスウェイ、養成システムの3つの観点から、それぞれの専門家からの情報提供をもとに議論する。この議論をもとに、競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか、ひいてはスポーツの価値を最大化するためのコーチの在り方についても検討する。

10:45 ～ 11:25

[競技スポーツ-SB-1]車いすテニス日本代表監督に至るパスウェイとコーチとしての学び

*中澤 吉裕¹ (1. 有限会社エヌプランニング)

<演者略歴>

車いすテニス日本代表監督、日本テニス協会強化本部車いすテニス委員会委員長兼普及本部多様化テニス委員会委員長、JPCスポーツコーチ、JSPOコーチ4（上級コーチ）。

22年ほど前、「世界を目指す選手を教えてみないか」と声が掛かり、あるパラ選手と出会った。彼は、障がいが一番重いクォードで活躍する選手であり、手加減した方がいいのかと彼の顔を見ると、真っ直ぐにこちらを見据えるその目に気が付き、ここまで本気なら一緒にやってみたいと思った。当初は健常者への指導経験が、車いすテニス選手への指導に役立つことが多く、指導中心のティーチングであったかもしれない。しかし、彼とともにトップを目指すようになると、成長を待つことが求められ、本当の意味でのコーチングを学んだ。これが現在では、健常者の指導にも活かされ、相互循環的なスキルアップの機会になった。彼の活躍をきっかけに、日本代表チームのコーチとして2002年の国別対抗戦に帯同。その後アジア大会、2012年ロンドン大会へ帯同。2015年8月からは代表監督に任命され、2016年リオデジャネイロ大会に監督として帯同し、東京大会を迎えた。世界一のチームを作るため、スポーツ心理学の専門家と連携しながら、指導者として更なる成長を目指した。当日は、パフォーマンスディレクター研修の活用など、自身のコーチとしての学びの実際について紹介する予定である。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 B】 テーマ別シンポジウム／パラ競技スポーツにおけるコーチ養成の現状とこれから

コーディネーター：内田 若希（九州大学）、広瀬 統一（早稲田大学）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:45 会場4 (Zoom)

本シンポジウムではパラ競技スポーツのコーチ養成の現状と今後について、指導論、パスウェイ、養成システムの3つの観点から、それぞれの専門家からの情報提供をもとに議論する。この議論をもとに、競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか、ひいてはスポーツの価値を最大化するためのコーチの在り方についても検討する。

11:25 ～ 12:05

[競技スポーツ-SB-2]日本におけるパラスポーツ指導者養成システムの現状と課題

*金子 元彦¹ (1. 東洋大学)

<演者略歴>

東洋大学ライフデザイン学部健康スポーツ学科准教授。修士（体育学）。一般理論としてのコーチング学の探求。2011年パラバドミントン世界選手権コーチ、JSAD中級障がい者スポーツ指導員、公認バドミントンコーチ3など。

日本のパラスポーツ指導者養成事業は、1966年財団法人日本身体障害者スポーツ協会（以下、「協会」とする）が主催した「身体障害者スポーツ指導者講習会」が最初で、以後、同等の講習会が毎年開催されてきた。そして、1985年に当時の身体障害者スポーツの振興と競技力向上にあたる指導者の資質向上などを企図して、「協会公認身体障害者スポーツ指導者制度」が制定された。このとき、身体障害者スポーツ指導員（現 初級）などとともに、身体障害者スポーツコーチ（現 スポーツコーチ）が定められた。しかし当時は各競技種目団体が整備されていなかったこともあり、身体障害者スポーツコーチ養成の講習会は行われず、暫定的に協会技術委員らが認定された。実質的な身体障害者スポーツコーチ養成の講習会が開始されるのは1997年であり、協会（2021）によれば、現在203名（2020年度現在）のスポーツコーチが認定されている。その後も協会は指導者養成についていくつかの変革を試みながら、2009年に「財団法人日本障害者スポーツ協会（現 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会）公認資格認定制度」と改称した。これらの変遷を踏まえ、日本におけるパラスポーツ指導者養成システムの現状と課題について話題提供してみたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 B】 テーマ別シンポジウム／パラ競技スポーツにおけるコーチ養成の現状とこれから

コーディネーター：内田 若希（九州大学）、広瀬 統一（早稲田大学）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:45 会場4 (Zoom)

本シンポジウムではパラ競技スポーツのコーチ養成の現状と今後について、指導論、パスウェイ、養成システムの3つの観点から、それぞれの専門家からの情報提供をもとに議論する。この議論をもとに、競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか、ひいてはスポーツの価値を最大化するためのコーチの在り方についても検討する。

12:05 ～ 12:45

[競技スポーツ-SB-3]世界のパラスポーツ指導における指導論の特徴

*伊藤 雅充¹ (1. 日本体育大学)

<演者略歴>

博士（学術）。NSSU Coach Developer Academyの運営責任者として100名以上の国際的なコーチデベロッパーを育成。国際コーチングエクセレンス評議会科学委員。開発途上国のパラスポーツコーチの育成にも尽力している。

国際コーチングエクセレンス評議会主催の世界コーチ会議において、パラスポーツを含む様々なスポーツ指導に関する議論が展開されている。そこでの議論は、運動実施者それぞれの文脈を踏まえ、その人の目標達成に向けて、その時の発達段階に適した支援を行っていくことが重要であるという、アスリートセンタードの概念が基盤となっている。そこには健常者や障がい者の別はない。ただ、対象者の特徴として、障害の種類や程度といった変数を考慮することが必要であるとされている。パラスポーツについては諸外国においても十分な知識が蓄積されているとは言えない。現在、EU圏内ではParaCoachEUプロジェクトが行われ、パラスポーツに関わる研究者や指導者らが協力して無償でパラスポーツ指導について学ぶことができるMOOCsの作成が進んでいる。また、国際スペシャルオリンピックス（SOI）においても、これまで指導者個人に任されていた指導に関する知恵を集積し、より高いレベルの指導者養成が可能なシステムを構築する方向で準備が進んできている。本シンポジウムでは、国際的な指導論の特徴と考えられるアスリートセンタードの概念と、ParaCoachEUやSOIなどの取り組み事例について紹介する。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

■ 2021年9月8日(水) 15:30 ~ 17:30 | 会場4 Zoom

競技スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるフィジカルトレーニングの新たな潮流

コーディネーター：熊野 陽人（関西福祉大学）、吉岡 伸輔（東京大学）

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）は常に進化を遂げている。このハイパフォーマンススポーツにおけるフィジカルトレーニングについて、「レジスタンストレーニング」「持久性トレーニング」「科学サポート」「身体負荷モニタリング」の4つの側面からスポットライトを当て、最新エビデンスやトレーニング方法など、そのトレンドに迫る。

15:30 ~ 16:00

[競技スポーツ-SC-1] レジスタンストレーニング研究における近年の潮流

*越田 専太郎¹ (1. 了徳寺大学)

16:00 ~ 16:30

[競技スポーツ-SC-2] rink side から生まれたタバタトレーニング

*田畑 泉¹ (1. 立命館大学)

16:30 ~ 17:00

[競技スポーツ-SC-3] トレーニングを個別化するためのアセスメント

*山下 大地¹ (1. 国立スポーツ科学センター)

17:00 ~ 17:30

[競技スポーツ-SC-4] ハイパフォーマンスアスリートの身体負荷モニタリング

*小山 孟志¹ (1. 東海大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるフィジカルトレーニングの新たな潮流

コーディネーター：熊野 陽人（関西福祉大学）、吉岡 伸輔（東京大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場4 (Zoom)

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）は常に進化を遂げている。このハイパフォーマンススポーツにおけるフィジカルトレーニングについて、「レジスタンストレーニング」「持久性トレーニング」「科学サポート」「身体負荷モニタリング」の4つの側面からスポットライトを当て、最新エビデンスやトレーニング方法など、そのトレンドに迫る。

15:30 ～ 16:00

[競技スポーツ-SC-1]レジスタンストレーニング研究における近年の潮流

*越田 専太郎¹ (1. 了徳寺大学)

<演者略歴>

2002年University of Oregonを修了後、University at Buffalo にてアスレティックトレーナーとして勤務。2005年8月に帰国後、広島大学大学院博士課程後期にて博士（保健学）を取得。2008年より現在まで了徳寺大学健康科学部整復医療・トレーナー学科で教鞭をとっている。

レジスタンストレーニングはすでに数多くのアスリートに対して取り組まれており、その有効性が数多くの narrative evidence や research evidence により示されていることは周知の事実である。レジスタンストレーニングは、負荷、トレーニング量と頻度、エクササイズ選択や順序、動作速度、セット間休息時間などの急性変数を操作することでプログラミングされ、実施の結果として生じる神経系および筋やその他の組織の適応はトレーニングプログラムに対して特異的であることが知られている。そのため、望むトレーニング効果を得るためにプログラムを最適化するための方策は、ハイパフォーマンスアスリートを含み多くの競技アスリート、指導者、ストレングスコーチおよび研究者にとって、常に興味関心の高いトピックである。そこで、テーマ別シンポジウムでは、近年示されてきた短期および長期のレジスタンストレーニングプログラムの最適化に関するリサーチを概観し、ハイパフォーマンスアスリートにおけるレジスタンストレーニングプログラミングの方策について考える。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるフィジカルトレーニングの新たな潮流

コーディネーター：熊野 陽人（関西福祉大学）、吉岡 伸輔（東京大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場4 (Zoom)

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）は常に進化を遂げている。このハイパフォーマンススポーツにおけるフィジカルトレーニングについて、「レジスタンストレーニング」「持久性トレーニング」「科学サポート」「身体負荷モニタリング」の4つの側面からスポットライトを当て、最新エビデンスやトレーニング方法など、そのトレンドに迫る。

16:00 ～ 16:30

[競技スポーツ-SC-2]rink side から生まれたタバタトレーニング

*田畑 泉¹ (1. 立命館大学)

<演者略歴>

1983年ノルウェー国立筋生理学研究所客員研究員、1986年東京大学大学院教育学研究科体育学専攻博士課程中途退学、1986年鹿屋体育大学助手、1992年国立健康・栄養研究所室長、1999年鹿屋体育大学教授、2002年国立健康・栄養研究所室長・部長・プログラムリーダー、2010年立命館大学教授。

高強度・短時間・間欠的運動トレーニングであるタバタトレーニングは、最大酸素摂取量の170%の強度の20秒間の自転車エルゴメータ運動を、10秒間の休息を挟み、6セット以上から8セットの途中で疲労困憊に至るトレーニングである。運動中の酸素摂取量が最大酸素摂取量に達し、総酸素借が最大酸素借に達することから、両エネルギー供給機構に最大の負荷をかけ、両エネルギー供給機構の能力を最大に高めることが知られている。このトレーニングは、入澤孝一高崎健康福祉大学教授（当時日本スピードスケートチームヘッドコーチ）がスピードスケートの競技力向上のために開発した2つのトレーニング方法の1つであり、それらを分析した結果、上記の代謝特性が明らかになり、発表された論文を知った多くのコーチ、アスリートが日々のトレーニングに採用している。

このトレーニングは、実験室において理論的に開発されたのではなく、実践の場（スピードスケートではリンク）において、トップコーチの経験値と観察力から開発されたものであり、それを当時最新の方法（最大酸素借及び間欠的運動中の酸素借の測定）により解析し、それをまた現場に戻すことができた例である。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】 ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるフィジカルトレーニングの新たな潮流

コーディネーター：熊野 陽人（関西福祉大学）、吉岡 伸輔（東京大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場4 (Zoom)

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ

（トップレベルの競技スポーツ）は常に進化を遂げている。このハイパフォーマンススポーツにおけるフィジカルトレーニングについて、「レジスタンストレーニング」「持久性トレーニング」「科学サポート」「身体負荷モニタリング」の4つの側面からスポットライトを当て、最新エビデンスやトレーニング方法など、そのトレンドに迫る。

16:30 ～ 17:00

[競技スポーツ-SC-3] トレーニングを個別化するためのアセスメント

*山下 大地¹ (1. 国立スポーツ科学センター)

<演者略歴>

国立スポーツ科学センター内にあるハイパフォーマンス・ジムの運営およびアスリートのトレーニングおよびアセスメントプログラムの向上を目的とした研究を行っている。専門はバイオメカニクスとストレングス&コンディショニング。博士（人間・環境学）。

ハイパフォーマンスアスリートは長期に亘り身に着けた身体能力をさらに伸ばすべく、日々トレーニングに励んでいる。トレーニング効果を最大化するためにアセスメントは必要な方法であり、近年は従来実験室でしか行うことができなかったさまざまな評価指標をトレーニング現場でも取得することができるようになっている。例えば私が専門としている動作分析はその最たる例であり、実験室で大掛かりに実施し時間をかけて分析してきたことを、簡便な方法で現場でも行う例が増えている。

しかし測定と解析を迅速に行えたとしても、結果に対して評価をし、個別化されたトレーニングを処方するまでのプロセスには課題が多い。トレーニングの効果も未知の点が多く、研究で明らかにする余地が多分にある分野である。そこで今回は、ハイパフォーマンススポーツにおける研究について議論をするための話題提供を目的とし、ハイパフォーマンス・ジムで進めている取り組みについて、研究事例から構想まで幅広く紹介する。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題C】ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるトレーニングをいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／ハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）におけるフィジカルトレーニングの新たな潮流

コーディネーター：熊野 陽人（関西福祉大学）、吉岡 伸輔（東京大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場4 (Zoom)

オリンピック・パラリンピックや主要国際大会での活躍を目指す、いわゆるハイパフォーマンススポーツ（トップレベルの競技スポーツ）は常に進化を遂げている。このハイパフォーマンススポーツにおけるフィジカルトレーニングについて、「レジスタンストレーニング」「持久性トレーニング」「科学サポート」「身体負荷モニタリング」の4つの側面からスポットライトを当て、最新エビデンスやトレーニング方法など、そのトレンドに迫る。

17:00 ～ 17:30

[競技スポーツ-SC-4]ハイパフォーマンスアスリートの身体負荷モニタリング

*小山 孟志¹ (1. 東海大学)

＜演者略歴＞

2006年東海大学大学院体育学研究科修士課程修了／2011～2013年（公財）日本バスケットボール協会男子専任ストレンクス&コンディショニングコーチ／2014年～現職／2021年早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士課程修了。

アスリートのコンディショニングを実施する際には、身体内外の負荷を定量化して現在のフィジカルコンディションを評価・分析することが必要不可欠であることは言うまでもない。近年、チームスポーツのトレーニングや試合における身体負荷をモニタリングし、選手のコンディショニングを最適化しようとする試みがスポーツ現場での主要なトピックスになっており、スポーツ科学分野においても論文数が急増している。身体負荷のモニタリングの方法は、外的負荷と内的負荷の二つに分類される。外的負荷とは、トレーニングや試合中に選手が行った活動の客観的な指標であり、Global Positioning System（GPS）や慣性センサ等を用いて計測される。内的負荷とは外的負荷に対する生理学的・心理学的な生体応答と定義され、各種生化学マーカーや主観的評価を用いて計測される。本シンポジウムではバスケットボール競技を対象とした身体負荷に関する研究や競技現場への応用事例を紹介し、現在の課題と今後の発展性について言及したい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】スポーツの産業化は生涯スポーツ・人・地域社会といかに関連するか

■ 2021年9月8日(水) 10:45 ~ 12:45 | 会場5 Zoom

生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／Well-Beingの実現に向けて：生涯スポーツのこれからと社会・産業、そして人

コーディネーター：松尾 哲矢（立教大学）、林 洋輔（大阪教育大学）

指定討論者：関根 正美（日本体育大学）

生涯スポーツの推進をめぐり、「スポーツと産業」およびそれらに関わる人々のありかたをめぐる議論が深まりを見せている。社会体育、コミュニティスポーツ、生涯スポーツと変遷してきた社会におけるスポーツの位置を確認するならば、人々とスポーツとの関わりの根底には万人のスポーツ権を保障するSport for All の思想が流れていたと理解できるし、その思想は平成23年のスポーツ基本法の前文で明示されるに至った。

スポーツと経済の結びつきは今や必然的なものであり、スポーツの成長産業化は、スポーツの社会的意義を経済的側面から裏打ちするものである。また今世紀以降における技術革新の促進は、スポーツ産業を取り巻く社会情勢にも大きな変化をもたらした。翻ってスポーツの産業化に拍車をかけることは、果たして人々の生活に「幸せ」をもたらすだろうか。この問いが本シンポジウムの問題意識である。

スポーツが私たちの生活に不可欠の位置を占める以上、スポーツの産業化がもたらす光と影、さらにスポーツ産業と人々が「よく生きる」こと、つまり「ウェルビーイングWell-Being」とスポーツ産業の関係を軸に議論を展開することは、重要かつ喫緊の検討課題とって間違いない。

10:45 ~ 11:25

[生涯スポーツ-SB-1] Well-being研究と展望

その社会との接点としてのスポーツ

*渡邊 淳司¹ (1. NTTコミュニケーション科学基礎研究所)

11:25 ~ 12:05

[生涯スポーツ-SB-2] Well-Beingの実現とスポーツの産業化

*高橋 義雄¹ (1. 筑波大学)

12:05 ~ 12:45

[生涯スポーツ-SB-3] 健康・科学・産業

産・官・学が生み出す健康の諸相とWell-Being

*重松 良祐¹ (1. 中京大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】スポーツの産業化は生涯スポーツ・人・地域社会といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／Well-Beingの実現に向けて：生涯スポーツのこれからと社会・産業、そして人

コーディネーター：松尾 哲矢（立教大学）、林 洋輔（大阪教育大学）

指定討論者：関根 正美（日本体育大学）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:45 会場5 (Zoom)

生涯スポーツの推進をめぐり、「スポーツと産業」およびそれらに関わる人々のありかたをめぐる議論が深まりを見せている。社会体育、コミュニティスポーツ、生涯スポーツと変遷してきた社会におけるスポーツの位置を確認するならば、人々とスポーツとの関わりの根底には万人のスポーツ権を保障するSport for All の思想が流れていたと理解できるし、その思想は平成23年のスポーツ基本法の前文で明示されるに至った。

スポーツと経済の結びつきは今や必然的なものであり、スポーツの成長産業化は、スポーツの社会的意義を経済的側面から裏打ちするものである。また今世紀以降における技術革新の促進は、スポーツ産業を取り巻く社会情勢にも大きな変化をもたらした。翻ってスポーツの産業化に拍車をかけることは、果たして人々の生活に「幸せ」をもたらすだろうか。この問いが本シンポジウムの問題意識である。

スポーツが私たちの生活に不可欠の位置を占める以上、スポーツの産業化がもたらす光と影、さらにスポーツ産業と人々が「よく生きる」こと、つまり「ウェルビーイングWell-Being」とスポーツ産業の関係を軸に議論を展開することは、重要かつ喫緊の検討課題といっている間違いない。

10:45 ～ 11:25

[生涯スポーツ-SB-1]Well-being研究と展望

その社会との接点としてのスポーツ

*渡邊 淳司¹ (1. NTTコミュニケーション科学基礎研究所)

＜演者略歴＞

NTTコミュニケーション科学基礎研究所 上席特別研究員。2005年 東京大学大学院 情報理工学系研究科修了。博士（情報理工学）。専門は触覚情報学、ポジティブコンピューティング。

近年、経済指標とは異なる、人の心を起点とした新しい価値として「ウェルビーイング」（Well-being）が注目されるようになった。ウェルビーイングの概念自体は、ギリシャ哲学の時代から探求されているテーマではあるが、近年は特に、テクノロジー分野や地方自治体・行政といった、モノづくりや制度設計の場においても取り上げられている。

ウェルビーイングとは、一時的な快の感情ではなく、自身の心身の健やかさと他者との調和のうまいバランスが維持された状態を意味し、その実現には、自身の特性に気がつくことや、他者との心理的・身体的な関わり方を会得することが重要である。そこで、本発表では、現在のウェルビーイング研究の潮流やその展望を紹介するとともに、スポーツの場においても、多様な人々のウェルビーイングがどのように立ち現れてくるのか、具体例とともに述べる。特に発表者が関わってきた、感覚や身体の異なる他者とのスポーツ観戦の取り組みや、パラ・アスリートと協働した子ども向けワークショップを例に挙げ、その設計において考慮したウェルビーイングの要因との関連について述べる。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】スポーツの産業化は生涯スポーツ・人・地域社会といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／Well-Beingの実現に向けて：生涯スポーツのこれからと社会・産業、そして人

コーディネーター：松尾 哲矢（立教大学）、林 洋輔（大阪教育大学）

指定討論者：関根 正美（日本体育大学）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:45 会場5 (Zoom)

生涯スポーツの推進をめぐり、「スポーツと産業」およびそれらに関わる人々のありかたをめぐる議論が深まりを見せている。社会体育、コミュニティスポーツ、生涯スポーツと変遷してきた社会におけるスポーツの位置を確認するならば、人々とスポーツとの関わりの根底には万人のスポーツ権を保障するSport for All の思想が流れていたと理解できるし、その思想は平成23年のスポーツ基本法の前文で明示されるに至った。

スポーツと経済の結びつきは今や必然的なものであり、スポーツの成長産業化は、スポーツの社会的意義を経済的側面から裏打ちするものである。また今世紀以降における技術革新の促進は、スポーツ産業を取り巻く社会情勢にも大きな変化をもたらした。翻ってスポーツの産業化に拍車をかけることは、果たして人々の生活に「幸せ」をもたらすだろうか。この問いが本シンポジウムの問題意識である。

スポーツが私たちの生活に不可欠の位置を占める以上、スポーツの産業化がもたらす光と影、さらにスポーツ産業と人々が「よく生きる」こと、つまり「ウェルビーイングWell-Being」とスポーツ産業の関係を軸に議論を展開することは、重要かつ喫緊の検討課題といっている間違いない。

11:25 ～ 12:05

[生涯スポーツ-SB-2]Well-Beingの実現とスポーツの産業化

*高橋 義雄¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。名古屋大学を経て、筑波大学体育系に勤務。博士（スポーツウエルネス学）。スポーツ社会学やスポーツ経営学を用いてスポーツの産業化を研究。

Well-Beingの実現とスポーツの産業化を考察するためには、「誰」の Well-Beingの実現であり、そして「産業化」が何を意味しているのかを明らかにすることが必要だろう。そこで、本発表では「産業化」を「経済的付加価値を生み出す行為と化す」こととし、Well-Being実現の対象をより具体的に論じてみたい。例えば、医療サービスで考えれば、医療関係者は、経済的付加価値を生み出す行為を提供しているため、医療は「産業化」しているともいえる。一方で、日本では国民皆保険制度によって原則として全国民が平等に保健医療を平等に受けられる機会が保障されている。翻って、スポーツ活動は、今日の産業化の潮流のなかで、Well-Beingを実現するためのスポーツ活動に関わる機会は公的な事業や制度によって保障されるだろうか。他方、人間の社会活動全体が経済活動化するなかで、スポーツの「産業化」は、スポーツ関連のサービスを提供する人々の生活を成立させている。以上のような考えを踏まえて、発表ではスポーツの「産業化」の現状を紹介し、「過剰な」スポーツの産業化とはどのようなことなのかについて考えてみたい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題B】スポーツの産業化は生涯スポーツ・人・地域社会といかに関連するか

生涯スポーツ研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／ Well-Beingの実現に向けて：生涯スポーツのこれからと社会・産業、そして人

コーディネーター：松尾 哲矢（立教大学）、林 洋輔（大阪教育大学）

指定討論者：関根 正美（日本体育大学）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:45 会場5 (Zoom)

生涯スポーツの推進をめぐり、「スポーツと産業」およびそれらに関わる人々のありかたをめぐる議論が深まりを見せている。社会体育、コミュニティスポーツ、生涯スポーツと変遷してきた社会におけるスポーツの位置を確認するならば、人々とスポーツとの関わりの根底には万人のスポーツ権を保障するSport for All の思想が流れていたと理解できるし、その思想は平成23年のスポーツ基本法の前文で明示されるに至った。

スポーツと経済の結びつきは今や必然的なものであり、スポーツの成長産業化は、スポーツの社会的意義を経済的側面から裏打ちするものである。また今世紀以降における技術革新の促進は、スポーツ産業を取り巻く社会情勢にも大きな変化をもたらした。翻ってスポーツの産業化に拍車をかけることは、果たして人々の生活に「幸せ」をもたらすだろうか。この問いが本シンポジウムの問題意識である。

スポーツが私たちの生活に不可欠の位置を占める以上、スポーツの産業化がもたらす光と影、さらにスポーツ産業と人々が「よく生きる」こと、つまり「ウェルビーイングWell-Being」とスポーツ産業の関係を軸に議論を展開することは、重要かつ喫緊の検討課題といってい間違いない。

12:05 ～ 12:45

[生涯スポーツ-SB-3]健康・科学・産業

産・官・学が生み出す健康の諸相と Well-Being

*重松 良祐¹ (1. 中京大学)

<演者略歴>

筑波大学大学院を修了後、筑波大学、長寿科学振興財団、三重大学を経て、中京大学スポーツ科学部に勤務。専門は「運動を通じた健康づくり」「傷害予防」「普及の科学」。

本発表では消滅可能性都市と言われる地方公共団体において産官学が協働している様子を報告し、3者のこれらの在り方の一例を提示する。

筆者が昨年まで所属していた三重大学は、中部電力株式会社と産学連携に関する包括協定を結んでいる。協定では三重県内の地域間格差是正をテーマの一つとしており、特に県南部の高齢化社会に適応する対策を講じている。尾鷲市と大台町は高齢率が高く、対策が進められていたことから、両市町と中部電力、筆者が協議を重ね、運動教室を2015年より定期開催するようになった。教室ではスクエアステップという楽しみながら実践できる種目を指導している。ボランティアリーダーが養成されるに連れて、自主活動が広がりつつある。

このような取組を通じ、介護予防事業が促進している。中部電力としては地域貢献、そして大学としては教育研究の充実といった点に成果を得ている。自主活動が広がりつつあることから、生活範囲内での人的交流の場が増えてきている。さらに、そこに参加する人たちは身体的・精神的・社会的な効果を得ている。このような成果から、上述した内容は過疎・高齢化の進む地域における産官学の協働モデルの一つとして提案できよう。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題C】人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

■ 2021年9月8日(水) 15:30 ~ 17:30 | 会場5 Zoom

生涯スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点：国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて

コーディネーター：中野 貴博（中京大学）

ここでは、「国民すべてのスポーツ権を保障する社会構築」を大命題とし、それに基づく生涯スポーツ社会を実現するための施策立案や現状施策の課題、そして、適切な環境構築への提言をすることを最終目的とします。あらゆるライフステージにおける運動・スポーツ参加を促進するための施策立案に少しでも役立つものとなれば良いと考えています。本企画は複数年に渡って実施する予定であり、初年度の2021年度は、様々な世代や対象者の運動・スポーツ参加の状況を共有し、施策や環境上の問題点、および、今後求められる施策などについて議論したいと思います。とりわけ、運動・スポーツ参加の減少が社会問題化している若年世代、そして、現状の政策等では不十分であると思われる中年世代や女性を対象とし、3名のシンポジストにその現状と課題について提起いただきます。各シンポジストからの提言を踏まえ、フロアの皆様と国民のスポーツ参加率が少しでも向上するような方策について議論したいと思います。その上で、今後の施策立案やそのために求められるエビデンスの収集につながるような議論を行うことを目指します。

15:30 ~ 16:10

[生涯スポーツ-SC-1] 中年世代の運動・スポーツ参加の現状と課題

*澤田 亨¹ (1. 早稲田大学)

16:10 ~ 16:50

[生涯スポーツ-SC-2] 若年世代の運動・スポーツ参加の現状と施策立案に向けた論点
「スポーツライフ・データ」を手がかりに

*宮本 幸子¹ (1. 笹川スポーツ財団)

16:50 ~ 17:30

[生涯スポーツ-SC-3] パーソナリティタイプに基づいたスポーツ・身体活動の促進のすすめ

*小笠原 悦子¹ (1. 順天堂大学大学院)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

生涯スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点：国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて

コーディネーター：中野 貴博（中京大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場5 (Zoom)

ここでは、「国民すべてのスポーツ権を保障する社会構築」を大命題とし、それに基づく生涯スポーツ社会を実現するための施策立案や現状施策の課題、そして、適切な環境構築への提言をすることを最終目的とします。あらゆるライフステージにおける運動・スポーツ参加を促進するための施策立案に少しでも役立つものとなれば良いと考えています。本企画は複数年に渡って実施する予定であり、初年度の2021年度は、様々な世代や対象者の運動・スポーツ参加の状況を共有し、施策や環境上の問題点、および、今後求められる施策などについて議論したいと思います。とりわけ、運動・スポーツ参加の減少が社会問題化している若年世代、そして、現状の政策等では不十分であると思われる中年世代や女性を対象とし、3名のシンポジストにその現状と課題について提起いただきます。各シンポジストからの提言を踏まえ、フロアの皆様と国民のスポーツ参加率が少しでも向上するような方策について議論したいと思います。その上で、今後の施策立案やそのために求められるエビデンスの収集につながるような議論を行うことを目指します。

15:30 ～ 16:10

[生涯スポーツ-SC-1] 中年世代の運動・スポーツ参加の現状と課題

*澤田 亨¹ (1. 早稲田大学)

<演者略歴>

1985年 東京ガス（株）人事部

2012年 国立健康・栄養研究所 身体活動研究部 室長

2018年 早稲田大学 スポーツ科学学術院 教授

中年世代の運動・スポーツ参加に関する現状は、スポーツ庁の「スポーツの実施状況等に関する世論調査」や厚生労働省の「国民健康・栄養調査」によって調査されています。また、中年世代を対象に含めた運動・スポーツに関する政策は、文部科学省/スポーツ庁の「スポーツ基本計画」や厚生労働省の「健康づくりのための身体活動指針（アクティブガイド）」が存在します。そして、両方とも改定作業が進められており、近い将来改定される予定になっています。本シンポジウムでは、中年世代の運動・スポーツ参加に関する現状と課題をみなさまと一緒に確認させていただいた後、「スポーツ基本計画」や「健康づくりのための身体活動指針（アクティブガイド）」の概要や改定の状況をご紹介します。そして、これらの政策の科学的根拠（エビデンス）となっている、運動やスポーツが中年世代の人々の健康や幸せ・元気におよぼす影響を調査した研究を紹介させていただきます。そして、中年世代の運動・スポーツ参加に関する課題を解決する方法や課題解決に向けた考え方についてみなさまと意見交換させていただきたいと考えています。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

生涯スポーツ研究部会【課題C】 テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点：国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて

コーディネーター：中野 貴博（中京大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場5 (Zoom)

ここでは、「国民すべてのスポーツ権を保障する社会構築」を大命題とし、それに基づく生涯スポーツ社会を実現するための施策立案や現状施策の課題、そして、適切な環境構築への提言をすることを最終目的とします。あらゆるライフステージにおける運動・スポーツ参加を促進するための施策立案に少しでも役立つものとなれば良いと考えています。本企画は複数年に渡って実施する予定であり、初年度の2021年度は、様々な世代や対象者の運動・スポーツ参加の状況を共有し、施策や環境上の問題点、および、今後求められる施策などについて議論したいと思います。とりわけ、運動・スポーツ参加の減少が社会問題化している若年世代、そして、現状の政策等では不十分であると思われる中年世代や女性を対象とし、3名のシンポジストにその現状と課題について提起いただきます。各シンポジストからの提言を踏まえ、フロアの皆様と国民のスポーツ参加率が少しでも向上するような方策について議論したいと思います。その上で、今後の施策立案やそのために求められるエビデンスの収集につながるような議論を行うことを目指します。

16:10 ～ 16:50

[生涯スポーツ-SC-2]若年世代の運動・スポーツ参加の現状と施策立案に向けた論点

「スポーツライフ・データ」を手がかりに

*宮本 幸子¹ (1. 笹川スポーツ財団)

<演者略歴>

東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。株式会社ベネッセコーポレーション入社後、ベネッセ教育総合研究所、国内教育事業市場リサーチ等を経て、2016年より笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所に所属。「スポーツライフ・データ」、保護者や小学校の調査等を担当。

本発表では、幼児から高校生までを「若年世代」とし、運動・スポーツ実施率の推移および現在の課題と対応する政策を扱います。若年世代に関しては、2008年に小学5年生・中学2年生を対象とした「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」が始まり、その結果は毎年メディアでも大きく取り上げられています。学術研究においても若年世代を対象としない領域は皆無に等しく、様々な知見が蓄積されています。今回のシンポジウムは複数年企画の初年度に位置づくものであり、個々の論点を掘り下げるのではなく、俯瞰的に現状と課題を整理することを目的とします。運動・スポーツ実施率に関しては、笹川スポーツ財団の「スポーツライフ・データ」の分析結果をご紹介します。「スポーツライフ・データ」は、10代は2001年から、4～9歳は2009年から、子どもと保護者を対象にほぼ隔年で実施している質問紙調査です。若年世代の運動・スポーツ実施状況を継続的に把握できるのが特徴です。本発表では運動・スポーツ実施率の推移や詳細のデータを提示するとともに、各年代の主な課題と対応する政策を概観し、今後の施策立案に必要な論点を考察したいと思います。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会 | 【課題C】 人生100年時代に向けていかに人々のスポーツ権を保障するか

生涯スポーツ研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／国民の運動・スポーツ参加の現状および問題点：国民のスポーツ権を保障するための施策立案に向けて

コーディネーター：中野 貴博（中京大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場5 (Zoom)

ここでは、「国民すべてのスポーツ権を保障する社会構築」を大命題とし、それに基づく生涯スポーツ社会を実現するための施策立案や現状施策の課題、そして、適切な環境構築への提言をすることを最終目的とします。あらゆるライフステージにおける運動・スポーツ参加を促進するための施策立案に少しでも役立つものとなれば良いと考えています。本企画は複数年に渡って実施する予定であり、初年度の2021年度は、様々な世代や対象者の運動・スポーツ参加の状況を共有し、施策や環境上の問題点、および、今後求められる施策などについて議論したいと思います。とりわけ、運動・スポーツ参加の減少が社会問題化している若年世代、そして、現状の政策等では不十分であると思われる中年世代や女性を対象とし、3名のシンポジストにその現状と課題について提起いただきます。各シンポジストからの提言を踏まえ、フロアの皆様と国民のスポーツ参加率が少しでも向上するような方策について議論したいと思います。その上で、今後の施策立案やそのために求められるエビデンスの収集につながるような議論を行うことを目指します。

16:50 ～ 17:30

[生涯スポーツ-SC-3]パーソナリティタイプに基づいたスポーツ・身体活動の促進のすすめ

*小笠原 悦子¹ (1. 順天堂大学大学院)

<演者略歴>

中京大学および鹿屋体育大学における競泳コーチを経て、オハイオ州立大学大学院博士課程にてスポーツマネジメントを専攻し、博士号（Ph.D.）取得。2002-2006年に国際女性スポーツワーキンググループ共同議長。現在は現職および女性スポーツ研究センター・センター長。アジアスポーツマネジメント学会会長（2018-2021）。

スポーツイングランドが2014年に14～25歳の約2000名のイギリス人を対象に、スポーツ及び身体活動に関する調査を実施しました。その結果、イギリスの若者は6つの異なるパーソナリティタイプに分類できることを明らかにしました。そして、それぞれは全く異なるパーソナリティ特性を持つことから、彼らへのインタビュー調査から、各パーソナリティごとにスポーツ・身体活動促進のためのアドバイスの方法も開発しました。順天堂大学ではこのデータを再分析し、日本の高校生を対象として、日本の若者のスポーツ・身体活動に関わるパーソナリティが7つに分類できることを明らかにしました。また、各パーソナリティに分類するアルゴリズムも開発し、さらには各7つのパーソナリティごとにアドバイスをする方法についても開発しました。これらの仕組み・プログラムについては特許出願中であり、引き続き、全国各地の高校生データの収集を継続しています。さらに、中高齢女性についても同様の研究を行い、高校生とは全く異なるタイプの7つのパーソナリティの存在を確認しています。これらのデータから見てきた日本のスポーツ・身体活動促進についての知見をご紹介します。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

■ 2021年9月8日(水) 10:45 ~ 12:25 | 会場6 Zoom

健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／認知機能改善のための身体活動の在り方

コーディネーター：樋口 貴広（東京都立大学）、根本 みゆき（筑波大学附属病院）

慢性的運動が認知機能改善に及ぼす効果について高い期待がある。本シンポジウムは、認知機能改善という目標に対して、体育・スポーツに携わる研究者がどのように貢献すべきなのかを考える機会として企画された。現状の研究成果や社会還元可能性について、体育領域における様々な領域から話題提供いただく。最新の知見を共有するとともに、領域横断としての新しいアプローチの可能性に議論することを目指す。兵頭氏には、高齢者の認知機能に対する運動の効果について、最新の知見をご紹介いただく。森氏には、子どもを対象とした身体活動と認知機能の研究としてどのような話題があるのかをご紹介いただく。水上氏には、認知症の専門家から見て、体育学会関係者にどのような情報提供を期待するのかについてご提言いただく。

10:45 ~ 11:18

[健康福祉-SB-1] 高齢者の認知機能維持・向上に資する運動の役割

*兵頭 和樹¹ (1. 公益財団法人明治安田厚生事業団体力医学研究所)

11:18 ~ 11:51

[健康福祉-SB-2] 運動と認知

子どもの運動発達の立場から

*森 司朗¹ (1. 鹿屋体育大学)

11:51 ~ 12:24

[健康福祉-SB-3] 認知症専門医の立場から体育分野に期待すること

*水上 勝義¹ (1. 筑波大学)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

健康福祉研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／認知機能改善のための身体活動の在り方

コーディネーター：樋口 貴広（東京都立大学）、根本 みゆき（筑波大学附属病院）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:25 会場6 (Zoom)

慢性的運動が認知機能改善に及ぼす効果について高い期待がある。本シンポジウムは、認知機能改善という目標に対して、体育・スポーツに携わる研究者がどのように貢献すべきなのかを考える機会として企画された。現状の研究成果や社会還元可能性について、体育領域における様々な領域から話題提供いただく。最新の知見を共有するとともに、領域横断としての新しいアプローチの可能性に議論することを目指す。兵頭氏には、高齢者の認知機能に対する運動の効果について、最新の知見をご紹介いただく。森氏には、子どもを対象とした身体活動と認知機能の研究としてどのような話題があるのかをご紹介いただく。水上氏には、認知症の専門家から見て、体育学会関係者にどのような情報提供を期待するのかについてご提言いただく。

10:45 ～ 11:18

[健康福祉-SB-1]高齢者の認知機能維持・向上に資する運動の役割

*兵頭 和樹¹ (1. 公益財団法人明治安田厚生事業団体力医学研究所)

<演者略歴>

筑波大学人間総合科学研究科体育科学専攻修了、博士（体育科学）

公益財団法人 明治安田厚生事業団 体力医学研究所 研究員

加齢に伴い、判断速度が低下したり一度に覚えられる物事が少なくなったりと、脳の様々な認知機能は低下していく。このような認知機能の低下は、高齢者の自立した生活を阻害する要因となることから、年を重ねてもQOLを高めて前向きに生活していくためには認知機能の維持増進は重要である。多くの研究で、運動・身体活動が脳の構造・機能的な変化（脳の体積増加や脳部位同士のネットワーク向上など）を起こして、高齢期における認知機能の維持・向上に役立つことが報告されている。近年では、こういった運動・身体活動（種類や強度・期間など）がより効果的・効率的なのかという視点に着目した研究も増えている。本発表では、どのような運動・身体活動が認知機能の維持・向上につながるのかについてこれまでの知見をまとめつつ、コロナ禍で高齢者の身体活動量や社会的つながりの低下が問題視されている昨今において、本研究所が取り組んでいるオンラインを通して身体活動増進・コミュニティ作りを目指す取り組みを紹介する。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題B】認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

健康福祉研究部会【課題 B】テーマ別シンポジウム／認知機能改善のための身体活動の在り方

コーディネーター：樋口 貴広（東京都立大学）、根本 みゆき（筑波大学附属病院）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:25 会場6 (Zoom)

慢性的運動が認知機能改善に及ぼす効果について高い期待がある。本シンポジウムは、認知機能改善という目標に対して、体育・スポーツに携わる研究者がどのように貢献すべきなのかを考える機会として企画された。現状の研究成果や社会還元可能性について、体育領域における様々な領域から話題提供いただく。最新の知見を共有するとともに、領域横断としての新しいアプローチの可能性に議論することを目指す。兵頭氏には、高齢者の認知機能に対する運動の効果について、最新の知見をご紹介いただく。森氏には、子どもを対象とした身体活動と認知機能の研究としてどのような話題があるのかをご紹介いただく。水上氏には、認知症の専門家から見て、体育学会関係者にどのような情報提供を期待するのかについてご提言いただく。

11:18 ～ 11:51

[健康福祉-SB-2]運動と認知

子どもの運動発達の立場から

*森 司朗¹ (1. 鹿屋体育大学)

<演者略歴>

東京学芸大学大学院修士課程教育学研究科保健体育専攻修了、鹿屋体育大学体育学部助手、東京学芸大学教育学部講師、同大学教育学部助教授、鹿屋体育大学助教授体育学部、同大学教授を歴任、現在、同大学理事・副学長、博士（医学）。

乳幼児期から児童期にかけて、子どもたちはそれまでに「できなかった」動きが「できる」ようになっていく重要な時期であり、人間の脳と身体機能のメカニズムが形成され、運動をコントロールする能力が急激に発達していく。

乳幼児から児童期への運動コントロール能力の発達は、目的性や方向性をもった自己の意志によってできるようになり、移動運動や操作運動などの基礎的運動パターンが獲得され、児童期にかけて修練・向上していくと同時に、環境の変化に応じた柔軟な動作ができるようになっていく。また、この運動コントロールの発達は情報処理システムの観点からとらえると感覚器官の鋭敏さや反応時間のような情報処理を支える構造的性能に相当するハードウェアと入力された情報の処理をするプログラムに相当するソフトウェアの2つから構成されており(工藤、2011)、乳幼児期から児童期にかけてハードウェアの関与が徐々に減少し、ソフトウェアの関与が増えていく。この変化は、学習方略や状況判断能力につながる運動記憶の発達やメタ認知の発達との関連が考えられ、この点を踏まえた最適な運動経験を引き出す環境を子どもたちに提供することが重要である。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題B】 認知機能の維持・改善に運動・スポーツはいかに貢献するか

健康福祉研究部会【課題 B】 テーマ別シンポジウム／認知機能改善のための身体活動の在り方

コーディネーター：樋口 貴広（東京都立大学）、根本 みゆき（筑波大学附属病院）

2021年9月8日(水) 10:45 ～ 12:25 会場6 (Zoom)

慢性的運動が認知機能改善に及ぼす効果について高い期待がある。本シンポジウムは、認知機能改善という目標に対して、体育・スポーツに携わる研究者がどのように貢献すべきなのかを考える機会として企画された。現状の研究成果や社会還元可能性について、体育領域における様々な領域から話題提供いただく。最新の知見を共有するとともに、領域横断としての新しいアプローチの可能性に議論することを目指す。兵頭氏には、高齢者の認知機能に対する運動の効果について、最新の知見をご紹介いただく。森氏には、子どもを対象とした身体活動と認知機能の研究としてどのような話題があるのかをご紹介いただく。水上氏には、認知症の専門家から見て、体育学会関係者にどのような情報提供を期待するのかについてご提言いただく。

11:51 ～ 12:24

[健康福祉-SB-3]認知症専門医の立場から体育分野に期待すること

*水上 勝義¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

1984年筑波大学医学専門学群卒業、1990年筑波大学臨床医学系講師、2002年同助教授、2012年筑波大学体育系教授。精神科医、認知症専門医。日本認知症学会理事、日本介護予防・健康づくり学会理事。

現在日本の認知症高齢者数は500万人、認知症予備群である軽度認知障害者数は400万人で、認知症は要介護の原因疾患の1位である。一方で認知症の根本治療薬がない現状において認知症の予防は重要な課題であり、そのことは2019年に厚生労働省が発表した認知症施策推進大綱にも明記されている。認知症の予防策として多くの取り組みが行われているが、もっともエビデンスが蓄積されているのが運動である。高齢者の認知機能に対する運動の効果や、運動習慣は認知症の発症リスクを低下することなどが報告されている。

一方、課題もある。1年以上運動を実践した RCT のメタ解析では、認知症の発症率に有意な低下はみられていない。また認知症予防に効果的な運動プログラムも定説に至っていない。すなわち運動の認知症予防効果に関する更なるエビデンスの蓄積が求められる。また十分全身運動ができない高齢者や、運動を楽しめない高齢者に対するアプローチも課題である。

体育学会関係者には、これらの課題解決に向けての検討、検討成果の情報発信、エビデンスに基づく実践活動の推進が望まれる。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

■ 2021年9月8日(水) 15:30～17:30 | 会場6 Zoom

健康福祉研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／テレワーク時代における心身の健康の保持増進の工夫と提言（新しい生活様式と健康の保持・増進）

コーディネーター：岩井 浩一（茨城県立医療大学）、沢井 史穂（日本女子体育大学）

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により、我々は生活様式の変更を余儀なくされている。その変更は極めて急速であり、スポーツ活動・運動習慣の変化や、それらが健康に及ぼす影響が十分に解明されない中で、その影響を予測して対策を施すことが必要とされている。本シンポジウムでは、研究者や職能団体の立場から俯瞰的に見た現状や課題、教育・指導現場における個々の実践事例を紹介して頂き、集積が必要だと思われるエビデンスおよび実践事例について議論し、研究・実践活動の指針を示したい。

15:30～16:00

[健康福祉-SC-1] COVID-19のパンデミックがもたらした就労者のライフスタイルの変容と健康への影響

*岡 浩一朗¹ (1. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

16:00～16:30

[健康福祉-SC-2] With/Afterコロナ下のフィットネス産業界の動向とビジョン

*岩井 智子¹ (1. 株式会社クラブビジネスジャパン)

16:30～17:00

[健康福祉-SC-3] 新生活様式におけるアダプテッド・スポーツの実践例

*塩田 琴美¹ (1. 慶應義塾大学総合政策学部)

17:00～17:30

[健康福祉-SC-4] クラウド型教育支援サービスによる緊急事態宣言下での健康教育

*大槻 毅¹ (1. 流通経済大学スポーツ健康科学部)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

健康福祉研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／テレワーク時代における心身の健康の保持増進の工夫と提言（新しい生活様式と健康の保持・増進）

コーディネーター：岩井 浩一（茨城県立医療大学）、沢井 史穂（日本女子体育大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場6 (Zoom)

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により、我々は生活様式の変更を余儀なくされている。その変更は極めて急速であり、スポーツ活動・運動習慣の変化や、それらが健康に及ぼす影響が十分に解明されない中で、その影響を予測して対策を施すことが必要とされている。本シンポジウムでは、研究者や職能団体の立場から俯瞰的に見た現状や課題、教育・指導現場における個々の実践事例を紹介して頂き、集積が必要だと思われるエビデンスおよび実践事例について議論し、研究・実践活動の指針を示したい。

15:30 ～ 16:00

[健康福祉-SC-1]COVID-19のパンデミックがもたらした就労者のライフスタイルの変容と健康への影響

*岡 浩一郎¹ (1. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

<演者略歴>

1999年早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了、博士（人間科学）取得。早稲田大学人間科学部助手、日本学術振興会特別研究員PD、東京都老人総合研究所介護予防緊急対策室主任を経て、2006年より早稲田大学スポーツ科学学術院准教授に着任。2012年より教授（現在に至る）。専門は、健康行動科学、行動疫学。

COVID-19パンデミックは、我々のライフスタイル、特に日常の身体活動や座位行動に変化をもたらし、結果として健康状態に大きな影響を及ぼしている。Tison et al. (2020) の研究では、一日の歩数に関して、初回の緊急事態宣言時に日本全体では最大2,000歩、東京では最大3,000歩程度減少傾向であったことが示されている。就労者の場合、リモートワークの導入により働き方が大きく変化し、それに伴い日常の身体活動や座位行動も増減している可能性がある。我々は、就労者を対象にした大規模な縦断調査を実施し、COVID-19の影響が全くない時期に比べて、緊急事態宣言後にリモートワークが増加したことに伴い、工作中的身体活動が減少し、座位行動が増加すること、さらにはそれらの変化が就労者の疲労感の増大に影響していることを明らかにした (Koohsari et al., 2020, 2021)。本話題提供では、これらの知見を含めた COVID-19パンデミックによる身体活動の減少や座位行動の増加ならびに心身の健康への影響を明らかにした研究事例を紹介するとともに、適切な身体活動量の確保や座りすぎ防止を促し、いわゆる健康二次被害を回避するための対策や、必要な研究課題等について議論したい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

健康福祉研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／テレワーク時代における心身の健康の保持増進の工夫と提言（新しい生活様式と健康の保持・増進）

コーディネーター：岩井 浩一（茨城県立医療大学）、沢井 史穂（日本女子体育大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場6 (Zoom)

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により、我々は生活様式の変更を余儀なくされている。その変更は極めて急速であり、スポーツ活動・運動習慣の変化や、それらが健康に及ぼす影響が十分に解明されない中で、その影響を予測して対策を施すことが必要とされている。本シンポジウムでは、研究者や職能団体の立場から俯瞰的に見た現状や課題、教育・指導現場における個々の実践事例を紹介して頂き、集積が必要だと思われるエビデンスおよび実践事例について議論し、研究・実践活動の指針を示したい。

16:00 ～ 16:30

[健康福祉-SC-2]With/Afterコロナ下のフィットネス産業界の動向とビジョン

*岩井 智子¹ (1. 株式会社クラブビジネスジャパン)

<演者略歴>

お茶の水女子大学文教育学部舞踊教育学科卒。大学時代にフィットネス指導者として活動を開始。卒業後、都市銀行、フィットネスクラブ運営企業などを経て、経営情報誌の編集に携わる。2002年より現職。国内外の業界トレンドの情報収集発信を行ってきている。2016年より公益社団法人日本フィットネス協会理事。

コロナ禍により、フィットネスクラブ運営企業の経営環境が悪化し、フィットネス参加者および参加率はコロナ以前の3割程度減少していると見られています。その一方で、長期化する外出自粛による身体活動量の不足による健康二次被害予防の観点から、フィットネス業界の社会的役割は高まっていると言えます。

コロナ禍で変化する環境変化への対応として、日本でもオンラインフィットネスが浸透していますが、オンラインフィットネスは、ユーチューブなどの無料コンテンツも多く、事業化しづらい側面がある一方で、既に競合サービスが激増し、レッドオーシャン市場となっています。

今後の市場動向予測として、海外のトレンドを分析したところ、「オンラインフィットネス」「アウトドアフィットネス」「パーソナルトレーニング」が3大トレンドとなっています。

また、フィットネス運営企業の経営課題としては、顧客エンゲージメント強化による継続率の向上と、価値の高いサービス拡充による顧客単価の向上です。緊急事態宣言が長期化する中、運営企業の現状の課題と今後の展望についても考察していきます。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

健康福祉研究部会【課題 C】テーマ別シンポジウム／テレワーク時代における心身の健康の保持増進の工夫と提言（新しい生活様式と健康の保持・増進）

コーディネーター：岩井 浩一（茨城県立医療大学）、沢井 史穂（日本女子体育大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場6 (Zoom)

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により、我々は生活様式の変更を余儀なくされている。その変更は極めて急速であり、スポーツ活動・運動習慣の変化や、それらが健康に及ぼす影響が十分に解明されない中で、その影響を予測して対策を施すことが必要とされている。本シンポジウムでは、研究者や職能団体の立場から俯瞰的に見た現状や課題、教育・指導現場における個々の実践事例を紹介して頂き、集積が必要だと思われるエビデンスおよび実践事例について議論し、研究・実践活動の指針を示したい。

16:30 ～ 17:00

[健康福祉-SC-3]新生活様式におけるアダプテッド・スポーツの実践例

*塩田 琴美¹ (1. 慶應義塾大学総合政策学部)

<演者略歴>

首都大学東京大学院保健科学研究科修了（博士号（保健科学））。了徳寺大学健康科学部理学療法学科助手・助教、

早稲田大学スポーツ科学学術院講師を経て現職。大学教員と兼ねて一般社団法人こみゅスポ研究所、一般社団法人こみゅと小平（地域総合型スポーツクラブ）の代表および株式会社CMU Holdingsの代表取締役を務める。

COVID-19感染拡大下である2020年度に一般大学生の身体活動量を計測した結果、1日の平均歩数

（3449.9歩）は感染拡大前の平均歩数（7483.8歩）より46.1 %減少し、身体活動量が大幅に低下をしていた。COVID-19 感染防止対策の長期化が見込まれる中、オンライン中心の生活様式においては、運動不足によりさらなる二次的な健康被害が懸念されている。特に、疾患・障害を有する障害者においては感染リスクも高いため、学校での部活動に加え地域でのスポーツイベント等の活動は制限されている。また、在宅においては、支援者が運動指導を行う上でも適した運動方法が分からない等、当事者の心身機能の低下による介護負担の増大など支援者側も悩みを抱えていることも多い。こうした COVID-19感染拡大期間中の身体活動についての先行研究は、健常者を対象にしたものは散見されるようになってきたが、障害者の身体活動の現状や課題は明らかになっていない。本シンポジウムでは、COVID-19感染予防対策下での身体活動の取り組みについて実践例を紹介すると共に、今後の方策について議論を深めたい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会 | 【課題C】運動不足（不活動）に伴う心身機能の低下をいかに予防するか

健康福祉研究部会【課題C】テーマ別シンポジウム／テレワーク時代における心身の健康の保持増進の工夫と提言（新しい生活様式と健康の保持・増進）

コーディネーター：岩井 浩一（茨城県立医療大学）、沢井 史穂（日本女子体育大学）

2021年9月8日(水) 15:30 ～ 17:30 会場6 (Zoom)

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により、我々は生活様式の変更を余儀なくされている。その変更は極めて急速であり、スポーツ活動・運動習慣の変化や、それらが健康に及ぼす影響が十分に解明されない中で、その影響を予測して対策を施すことが必要とされている。本シンポジウムでは、研究者や職能団体の立場から俯瞰的に見た現状や課題、教育・指導現場における個々の実践事例を紹介して頂き、集積が必要だと思われるエビデンスおよび実践事例について議論し、研究・実践活動の指針を示したい。

17:00 ～ 17:30

[健康福祉-SC-4]クラウド型教育支援サービスによる緊急事態宣言下での健康教育

*大槻 毅¹ (1. 流通経済大学スポーツ健康科学部)

＜演者略歴＞

筑波大学大学院体育科学研究科修了（博士〔体育科学〕）。筑波大学先端学際領域研究センター研究機関研究員、京都府立医科大学生体機能制御学博士研究員などを経て現職。スポーツ庁パブコンで高齢者の健康づくりと防災教育を兼ねた事業を提案して長官賞を受賞し（2020.9）、その具現化に取り組んでいる。

2020年4月7日の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）緊急事態宣言発出を受け、茨城県龍ケ崎市および千葉県松戸市にキャンパスを置く流通経済大学は、4月20日に授業をオンラインでスタートした。学生の通信環境に配慮し、授業の多くは録画の視聴等によるオンデマンド受講を可能にしており、生活習慣の乱れ（就寝・起床時刻の遅れ、朝食の欠食など）等による学生の健康状態の低下が懸念された。一方で、生活習慣が乱れたり、オンライン授業および外出自粛にストレスを感じたりする状況は、学生に健康教育を施す好機であるとも考えられた。そこで流通経済大学スポーツ健康科学部では、授業および学生指導等に用いるクラウド型教育支援サービス（manaba）を利用した健康教育を企画し、授業開始直後の4月22日から約1年間にわたり実施した。本発表では、クラウド型教育支援サービスを用いた健康教育の内容、学生の参加状況、教育成果等を紹介し、緊急事態宣言下および新しい生活様式において実施可能な大学生の健康教育について議論したい。